

西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(18)

—— 県道（西之表～南種子線）改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

東前平遺跡

2006年3月

鹿児島県西之表市教育委員会

序 文

種子島は、黒潮海流の中に位置し、低平な大地と数多くの小川があり、照葉樹林が繁茂し、古くから自然の恵みを受け豊かな環境のもとにあることから、島の各所から遺跡が数多く発見されています。

この東前平遺跡は、県道（西之表南種子線）改築事業に伴い、西之表市教育委員会が主体となり発掘調査を実施したものであります。

本遺跡からは、縄文時代早期の土器の他にも、石鏃、磨製石斧などの石器類、集石、配石が出土しています。種子島の東海岸のあちこちから同時期の遺物が出土していることから、ある程度の縄文人が海を渡って種子島にやってきたものと思われます。これらの遺跡の後背地には豊かな照葉樹林帯が広がっており、狩猟生活に適した環境であったことがわかります。

本報告書が学術的文献として活用され、市民の埋蔵文化財保護に対する認識を高める一助となれば幸いです。

最期に、発掘調査及び本報告書を刊行するにあたり、ご協力いただきました鹿児島県教育庁文化財課及び同県立埋蔵文化財センターをはじめ、安城地区の関係者、熊毛支庁土木課、さらに貴重なご助言をいただきました諸先生方に対して厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

西之表市教育委員会教育長

有 島 正 之

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひがしまえだいら いせき							
書名	東前平遺跡							
副書名	県道（西之表南種子線）改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	18							
編集者名	沖田純一郎							
編集機関	西之表市教育委員会							
所在地	〒891-3193 鹿児島県西之表市西之表7612番地							
発行年月日	2006年3月25日							
所収遺跡名	所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
東前平遺跡	鹿児島県	462136	108	30° 37′ 32″	131° 03′ 10″	確認調査	151m ²	県道改築 事業
	西之表市					20020212		
	安城大野					緊急調査 (Ⅱ地点)	20020225	
						20020722	120m ²	
						20020807		
東前平	(Ⅰ地点)	20030507	1,600m ²					
	20030910							
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物		特記事項		
東前平遺跡	散布地	縄文時代早期	集石 配石	土器 (押型文土器) (貝殻文系土器) 石鏃 石斧 石核 剥片 異形石器 磨石・敲石 台石・石皿類				

例 言

1. 本書は県道（西之表・南種子線）改築事業に伴う東前平遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査は、鹿児島県土木部（熊毛支庁土木課）の委託を受け、西之表市教育委員会が実施した。
3. 本書に用いたレベル数値は、熊毛支庁土木課が作成した地形図に基づく海拔高である。
4. 本書の遺物番号は全て通し番号で本文及び挿図・図版番号と一致する。
5. 発掘調査における測量・実測・写真撮影は沖田が行い、中村桂子・安藤美津子・村松真由子・桑原とも子・下園恵が測量・実測の補助を行った。
6. 本書の執筆と編集は沖田が行った。
遺物の実測・トレース・図面整理は沖田・荒井美佳子・中村桂子・下園恵・秋山舞
中野史央央・種子田あゆみ・河野蘭子・安藤美津子・小倉千里・高石香織・大山薫・
種子田ゆかり・田畑奈枝沙が行った。
なお、石器類の一部の実測・トレースを九州文化財研究所に委託した。
7. 写真図版の遺物撮影は種子島開発総合センター委託職員尾形之善氏と沖田が行った。
8. 出土遺物の科学分析はバリノ・サーヴェイ㈱が行った。
9. 発掘調査及び整理作業に関して、鹿児島県教育庁文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・協力を得た。
10. 出土遺物は西之表市教育委員会で保管し、展示・活用する。

目 次

序 文

報告書抄録

例 言

第I章 調査の経過	1	第3節 遺 構	20
第1節 調査に至る経緯	1	第4節 遺 物	25
第2節 調査の組織	2	(1) 土 器	25
第3節 調査の経過	2	(2) 石器類	30
第II章 遺跡の位置と環境	10	第IV章 科学分析	62
第1節 遺跡の位置	10	第V章 調査のまとめ	69
第2節 遺跡の環境	10	第1節 遺 構	69
第III章 発掘調査の概要	13	第2節 遺 物	69
第1節 調査の概要	13	第3節 総 括	70
第2節 層 位	13		

挿 図 目 次

第1図 東前平遺跡の位置		第18図 I地点全遺物出土状況	33
第2図 東前平遺跡(I・II)位置図	3	第19図 I地点全遺物出土状況	34
第3図 II地点調査地	4	第20図 I地点全土器出土状況	35
第4図 I地点発掘調査地・グリット設定図	6	第21図 IV類土器出土状況	36
第5図 東前平遺跡と周辺遺跡図	11	第22図 出土遺物(1)	37
第6図 II地点土層断面図	14	第23図 V類土器出土状況	38
第7図 I地点西側土層断面図(1)	15	第24図 出土遺物(2)	39
第8図 I地点西側土層断面図(2)	16	第25図 出土遺物(3)	40
第9図 I地点B-1区東側土層断面	17	第26図 VI類土器出土状況	41
第10図 I地点B-7・8区東側土層断面	18	第27図 出土遺物(4)	42
第11図 I地点B・C-12区南側土層断面	19	第28図 VII類土器出土状況	43
第12図 遺 構	21	第29図 出土遺物(5)	44
第13図 II地点遺構配置図・全遺物出土状況	22	第30図 出土遺物(6)	45
第14図 5号集石配置図	23	第31図 VIII類土器出土状況	46
第15図 5号集石	24	第32図 出土遺物(7)	47
第16図 II地点出土遺物(1)	26	第33図 出土遺物(8)	48
第17図 II地点出土遺物(2)	27	第34図 IX類土器・底部出土状況	49

插图目次

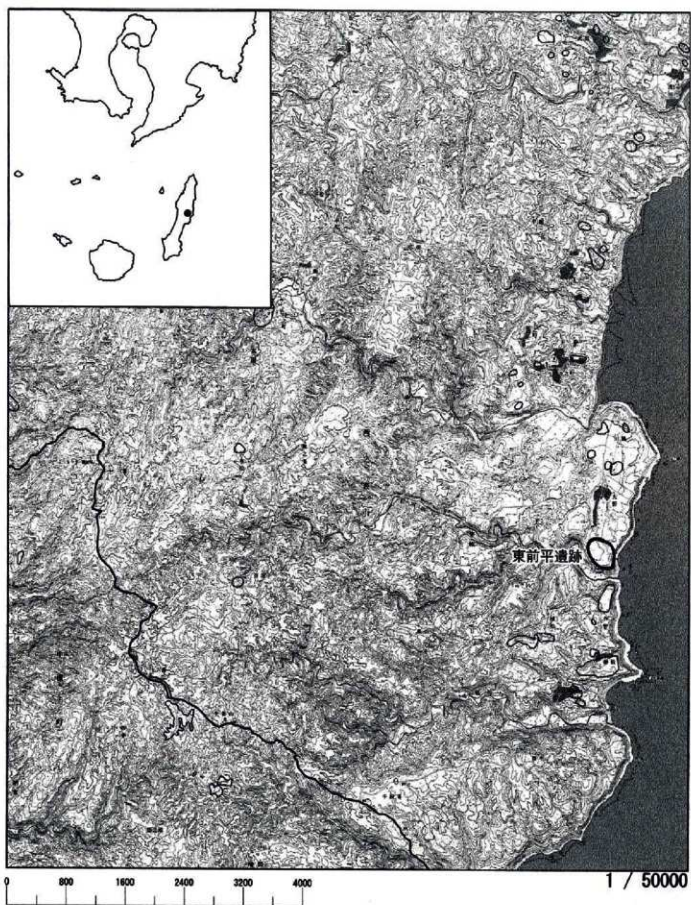
第35图	出土遺物(9).....	50	第39图	出土遺物(1).....	54
第36图	I 地点全石器類出土狀況.....	51	第40图	出土遺物(2).....	55
第37图	I 地点全石器類出土狀況.....	52	第41图	出土遺物(3).....	56
第38图	出土遺物(10).....	53			

表目次

第1表	東前平遺跡周辺遺跡地名表.....	12	第5表	土器觀察表(2).....	58
第2表	土器觀察表.....	28	第6表	土器觀察表(3).....	59
第3表	石器觀察表.....	29	第7表	石器觀察表(1).....	60
第4表	土器觀察表(1).....	57	第8表	石器觀察表(2).....	61

写真図版

図版1	II 地点調査風景(1).....	71	図版13	II 地点出土遺物(2).....	83
図版2	II 地点調査風景(2).....	72	図版14	I 地点出土遺物(1).....	84
図版3	II 地点遺構.....	73	図版15	I 地点出土遺物(2).....	85
図版4	II 地点土器出土狀況・土層断面.....	74	図版16	I 地点出土遺物(3).....	86
図版5	I 地点調査風景(1).....	75	図版17	I 地点出土遺物(4).....	87
図版6	I 地点調査風景(2).....	76	図版18	I 地点出土遺物(5).....	88
図版7	I 地点土層断面・集石・遺物出土狀況.....	77	図版19	I 地点出土遺物(6).....	89
図版8	I 地点遺物出土狀況.....	78	図版20	I 地点出土遺物(7).....	90
図版9	I 地点遺物出土狀況.....	79	図版21	I 地点出土遺物(8).....	91
図版10	I 地点遺物出土狀況.....	80	図版22	I 地点出土遺物(9).....	92
図版11	I 地点遺物出土狀況.....	81	図版23	I 地点出土遺物(10).....	93
図版12	II 地点出土遺物(1).....	82	図版24	I 地点出土遺物(11).....	94



第1図 東前平遺跡の位置

第I章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

鹿児島県土木部道路建設課（熊毛支庁土木課）は、西之表市安城・立山地区内において県道西之表南種子線道路改築事業を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財（以下県文化財課）に照会した。

これをうけて、県文化財課が平成13年3月に埋蔵文化財分布調査を実施した。その結果、事業区内に東前平遺跡地他9箇所の遺跡が所在することが判明した。

分布調査の結果をもとに熊毛支庁土木課・県文化財課・西之表市教育委員会で協議を行った結果、開発事業と埋蔵文化財の調整を図るため埋蔵文化財確認調査を実施することとなった。東前平遺跡の確認調査は西之表市教育委員会が調査主体となり、平成14年2月に実施した。調査の結果、工事対象地内の2地区で遺物包含層が確認され、南側の発掘調査対象地が広い地区をI地点、北側をII地点と呼ぶことにした。

確認調査の結果をもとに、熊毛支庁土木課・県文化財課・西之表市教育委員会で協議を行い、埋蔵文化財と開発事業の調整を図るためにI地点・II地点の緊急発掘調査を行い遺跡の記録保存を行うこととなった。

緊急発掘調査はII地点が平成14年7月に、I地点は平成15年5月に実施した。整理・報告書作成作業は平成15・16・17年度に行った。

第2節 調査の組織

(II地点発掘調査)

事業主体者	鹿児島県土木部 熊毛支庁土木課
発掘調査主体者	西之表市教育委員会
発掘調査責任者	西之表市教育委員会 教育長 有島 正之
発掘調査企画担当	西之表市教育委員会 文化課 課長 鮫島 市憲 〃 〃 課長補佐 奥村 学
発掘調査担当	西之表市教育委員会 文化課 主 事 沖田純一郎
発掘調査指導	鹿児島県教育庁文化財課
発掘調査作業員	牧瀬文子・山口良子・山口くみ子・鮫島ミワ子・鮫島美伊子・徳永ミツエ 長野フミエ・中村桂子・安藤美津子・桑原とも子

(I地点発掘調査)

事業主体者	鹿児島県土木部 熊毛支庁土木課
発掘調査主体者	西之表市教育委員会
発掘調査責任者	西之表市教育委員会 教育長 有島 正之
発掘調査企画担当	西之表市教育委員会 社会教育課 課長 阿世知猛雄 〃 〃 課長補佐 奥村 学

発掘調査担当 西之表市教育委員会 社会教育課 主 事 沖田純一郎
 発掘調査指導 鹿児島県教育庁文化財課
 発掘調査作業員 田上夏年・金澤光治・榎元オリエ・遠藤ハツ子・長濱トミ子・竹之内綾子
 日高アヤ子・上妻レイ子・鮫島ミワ子・長野フミエ・徳永ミツエ・小川良子
 長野フミ子・牧瀬文子・入鹿山えり子・桑原とも子・村松真由子・下園 恵

(整理・報告書作成)

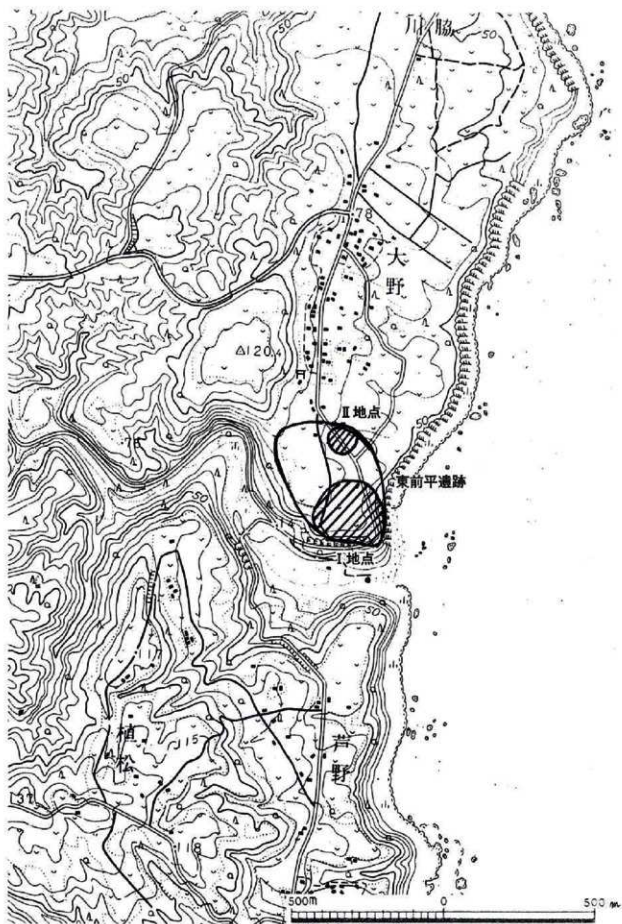
事業主体者 鹿児島県土木部 熊毛支庁土木課
 作成主体者 西之表市教育委員会
 作成責任者 西之表市教育委員会 教 育 長 有島 正之
 作成企画者 西之表市教育委員会 社会教育課 課 長 阿世知猛雄 (平成15・16年度)
 西之表市教育委員会 社会教育課 課 長 河野 博康 (平成17年度)
 〃 〃 課長補佐 奥村 学
 作成庶務担当 西之表市教育委員会 社会教育課 主 査 阿世知美代子 (平成16年度)
 西之表市教育委員会 社会教育課 主 査 濱渡 友子 (平成17年度)
 作成担当 西之表市教育委員会 社会教育課 主 事 沖田純一郎
 整理作業指導 鹿児島県教育庁文化財課 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 整理作業員 荒井美佳子・内田順子・末満直美・中村桂子・原 里菜・下園 恵
 河野蘭子・中野史央合・秋山 舞・種子田あゆみ・小倉千里・高石香織
 種子田ゆかり・田畑奈枝沙・大山 薫

第3節 調査の経過

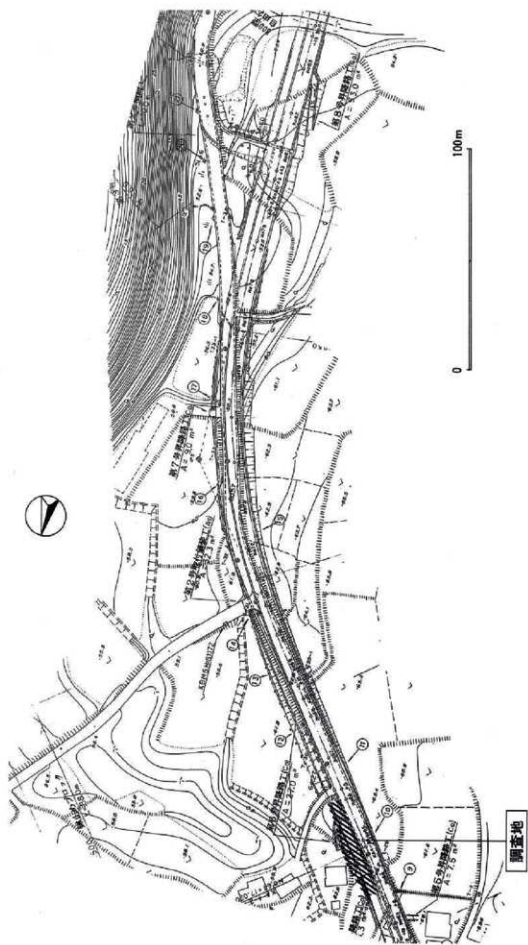
(Ⅱ地点)

Ⅱ地点の発掘調査は平成14年7月22日から8月7日まで行った。発掘調査対象地は道路工事で削平される部分のみで、Ⅱ地点の調査面積は狭小であった。確認調査の結果から、遺物・遺構はアカホヤ火山灰層下位より出土しているため、重機でアカホヤ火山灰層までを除去した後、人力で掘り下げを行っていった。調査面積は約120㎡である。以下調査内容については調査日誌より抜粋する。

7月22日	月	南側より掘り下げ。集石2基検出。土器片数点出土。鮫島文化課長・奥村文化課課長補佐来跡。
23日	火	2号集石検出作業，写真撮影，実測。3号集石検出。
24日	水	2号集石実測終了。1・3号集石検出作業。台風接近のため作業15時で終了。一般市民・農協職員来跡。
25日	木	台風のため発掘作業中止。整理作業行う。
26日	金	午前中整理作業。発掘作業は午後から行う。土器片数点出土。市役所農林水産課職員来跡。
29日	月	4号集石検出。掘り下げ。
30日	火	1・3号集石実測。現道際掘り下げ。



第2図 東前平遺跡 (I・II) 位置図



第3圖 I 地点調查地

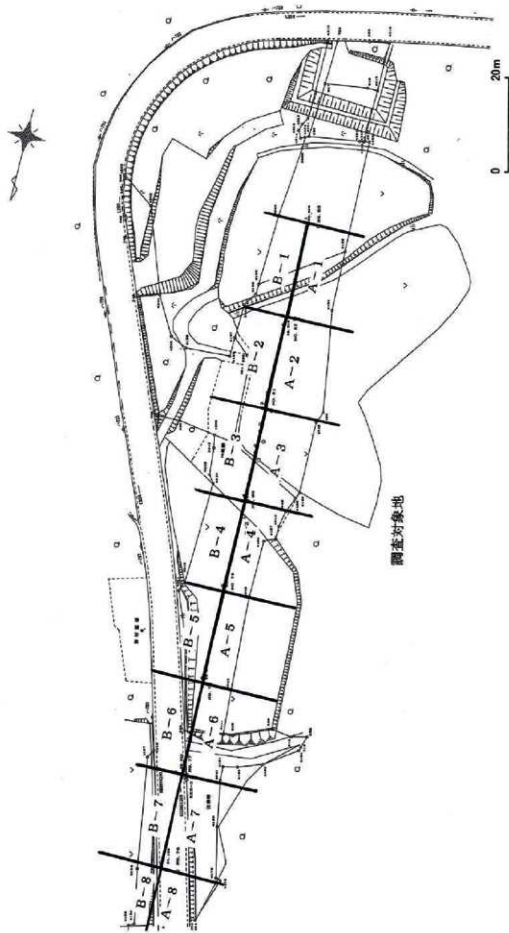
31日	水	1・3号集石実測。平板，レベル遺物取り上げ。
8月1日	木	1・3号集石実測終了。4号集石検出作業。平板，レベル遺物取り上げ。石園西之表市教委学校教育課長来跡。
2日	金	1・2号配石検出。4号集石検出。東側土層断面図作成。掘り下げ。
5日	月	1・2号配石実測終了。4号集石検出。平板，レベル遺物取り上げ。
6日	火	4号集石実測。西側土層断面図作成。平板，レベル遺物取り上げ。
7日	水	4号集石実測。土層断面図作成。コンタ図作成。調査状況写真撮影。調査終了。鮫島文化課長・奥村文化課長補佐来跡。

(I地点)

I地点の発掘調査は平成15年5月7日から9月10日まで行った。調査地対象地内に、工事のセンター杭を基準に20mグリッドを設置し、西から東をA区・B区とし南から北へ1区から8区とした。調査は表土からアカホヤ火山灰層までを重機で除去した後、人力で掘り下げながら遺物・遺構の検出を行った。A・B-4区から6区、B-7区は確認調査時に作物の都合等で、調査を実施しなかった箇所であったため、最初にトレンチ調査を行い遺物包含層が確認された時点で全面調査を行うこととしたが、遺物包含層は確認されなかったため、調査対象地から除外した。A-8区の渠道を挟んで東側の畑地は確認調査で遺物包含層が確認されたため、工事で掘削される部分のみを調査対象とした。

調査地対象地は、畑地を除いて樹木が密集して繁茂しており、樹木の伐採・伐根作業に多くの時間・労力を費やす結果となった。調査面積は約1,600㎡である。以下調査内容については調査日誌より抜粋する。

5月7日	水	調査地，立木伐採作業・プレハブ設置場所，重機により地下げ作業・排土処理作業・測量杭確認作業
8日	木	立木伐採除去作業・プレハブ立置場所整地作業・ベルトコンベア設置
9日	金	伐採，伐根作業・A区重機により表土除去作業・プレハブ設置
12日	月	A・B-1区掘り下げ，一部表土除去，人力による掘り下げ。石鏝1点，土器片数点出土。阿世知社会教育課長・奥村補佐来跡。
13日	火	A・B-1区掘り下げ，土器少片出土する。文化財保護審議委員（4名）・阿世知社会教育課長・奥村課長補佐・有島教育長来跡。
15日	木	B-1・2区重機により表土除去・人力にて壁面清掃，A-1・2区掘り下げ。土器片出土する。A-2区礫集中箇所・土器・石鏝出土状況の写真撮影。
16日	金	A・B-1区掘り下げ，土器片出土する。A・B-1区・A・B-2区・A・B-3区重機にて表土除去作業。人力にて排土処理・壁面仮清掃作業。ベルトコンベア・発電機設置。
19日	月	A・B-1区・A・B-2区掘り下げ，遺物出土する。A・B-2区出土土器小片一括取り上げを行う。



第4図 I 地点発掘調査地・グリッド設定図

20日	火	A・B-1・2区掘り下げ。土器片、石器等出土する。重機にて表土はぎ実施。小片土器一括取上げを行う。奥村文化課長補佐・県文化財課堂込氏来跡。
21日	水	A・B-1・2区掘り下げ。南側アカホヤ面除去作業。北側より土器片、礫が出土する。A-2区北側より、土器片やや多めに出土する。種子島開発総合センター尾形之善氏来跡。
22日	木	A-1・2・3区掘り下げ。A-2区より石鏃1点出土する。
23日	金	出土遺物写真撮影。サトウキビ畑トレンチ掘り下げ、土器片1点出土する。A-1・2・3区西側掘り下げ。磨製石斧出土する。
26日	月	2・3・4区の掘り下げ、土器片少量出土する。
28日	水	1区土手際、東側2・3区掘り下げ。土手際より、石鏃1点・磨製石斧1点出土する。熊毛支庁土木課職員2名県道分布調査のため来跡。県文化財課堂込氏来跡。
29日	木	A・B-1・2区南側掘り下げ。A-1区に磨製石斧が出土する。A・B-1・2・3区、平板・レベル遺物取上げ。取上げ遺物177点。
6月2日	月	A・B-1・2・3区出土状況写真撮影。A・B-2・3区掘り下げ。奥村補佐来跡。
3日	火	A-2区掘り下げ、土器片・西側壁より礫3点検出する。出土遺物水洗い作業。種子島開発総合センター尾形氏来跡。
4日	水	重機によりA・B-1・2区南側土手崩し。A-2・3区B-2区掘り下げ、礫・土器片出土する。近畿機械産業2名ベルトコンベアメンテナンスのため来跡。
5日	木	A・B-1区掘り下げ。A-2区西側壁面出土状況清掃。写真撮影。B-7・8重機にて表土除去作業。人力にて東側壁面清掃。排土の件で熊毛支庁土木課橋木氏来跡。
6日	金	発掘体験準備・ABCトレンチ配置図作成、平板・レベル遺物取上げ。遺物集中出土区にブルーシートを張る。阿世知社会教育課長・有島教育長・発掘体験のため現和中学校1年生来跡。
10日	火	A-1・3区、B-2・3・7・8区掘り下げ作業。B-2区より土器片、A-3区より石鏃1点出土する。安城校区長徳永氏来跡。
11日	水	B-7・8区、A・B-2・3区掘り下げ。B-7・8区石鏃2本、黒曜石剥片2点、すり石3個石皿1点出土する。A・B-2・3区北側壁面より、集石検出。奥村補佐来跡。
12日	木	B-7・8区掘り下げ。
13日	金	B-7・8区掘り下げ。遺物取上げ、写真撮影、土層断面作成。
17日	火	出土遺物水洗い、道具研磨作業。B-7・8区埋め戻し作業。
18日	水	A・B-1・2・3区平板・レベル遺物取上げ。B-7・8区埋め戻し作業。熊毛支庁土木課橋木氏他2名来跡。
20日	金	掘り下げ。スライド及び遺物・遺跡の説明・火おこし体験等実施。掘り下げ作業。
23日	月	A・B-3区掘り下げ。石斧、すり石類、黒曜石剥片、土器出土する。

24日	火	A-3区西壁掘り下げ。土器片、すり石、石鏃（未成品）など出土する。A・B-3区北側斜面地、重機にて黒色土除去。発破作業の案内のため藤田建設作業員1名来跡。
25日	水	遺物整理。注記作業。奥村補佐来跡。
26日	木	A・B-3区掘り下げ。種子島開発総合センター尾形氏来跡。
27日	金	A・B-3区掘り下げ。遺物出土する。写真撮影。遺物取上げ。南種子町教育委員会石堂氏来跡。
30日	月	A-2・3区ベルトコンベア設置。A-3区西側より、礫3点。黒曜石剥片1点が出土する。
7月1日	火	A-1・2区平板・レベル。遺物取上げA-3区北側より集石検出。打製石鏃2点出土する。安城小学校教員1名来跡。
2日	水	A・B-2区掘り下げ。A-2区礫3点出土地清掃写真撮影。礫3点平面実測。奥村補佐・立山武田氏・一般市民来跡。
3日	木	集石検出、水洗い及び清掃作業、写真撮影後シートをかぶせる。A-3区側集石と同じレベルまで掘り下げ。遺物出土する。安城小学校校長来跡。
4日	金	A-2区遺物集中出土区ベルト設置。掘り下げ遺物取上げ地より、再び土器片等出土する。シートをかぶせ乾燥を防ぐ。西之表市総務課川畑氏・吉田氏来跡。
7日	月	掘り下げ。土器片・すり石出土。河野教育委員会総務課長来跡。
8日	火	掘り下げ。ベルトコンベア2台入れ替えのため近畿機械産業2名来跡。
9日	水	掘り下げ。平板・レベル遺物取上げ。
10日	木	掘り下げ。礫・土器片出土。熊毛支庁土木課橋木氏来跡。県文化財課堂込氏調査指導のため来跡。
11日	金	清掃、写真撮影、平板・レベル遺物取上げ。調査指導のため県文化財課堂込氏来跡。
14日	月	A・B-3区掘り下げ。A-3区側から炭化物が多く出土する。土納作り、及びブルーシートをA・B-2区に敷く。
15日	火	A・B-2区掘り下げ。出土遺物説明・オリエンテーション。発掘体験学習準備のため安城小学校教諭2名来跡。
16日	水	A・B-3区掘り下げ。A-3区より土器片出土する。発掘体験学習（安城小学校児童17名教員5名）・奥村補佐来跡。
17日	木	A・B-3区掘り下げ。発掘体験学習（同上小学校6年生21名・教員1名）、種子島開発総合センター尾形氏・奥村文化課長補佐来跡。
18日	金	A-2区掘り下げ。西側より土器片・石斧が出土する。A・B-2・3区平板・レベル遺物取上げ。安城小学校校長来跡。
22日	火	ベルトコンベア1台撤去。A・B-3区掘り下げ。
23日	水	B-2区掘り下げ。A-1・2、B-2区平板・レベル遺物取上げ。A・B-2区北側ブルーシートをかぶせる。

24日	木	A・B-2区掘り下げ。磨製石鏃・土器出土する。
25日	金	A・B-2区掘り下げ。B-2区ビット検出作業。A-2区は遺構検出のため黄褐色土まで掘り下げる。
28日	月	A-2区北側掘り下げ。遺構検出作業。道具掃除，出土遺物水洗い作業。
8月1日	金	A・B-2区掘り下げ。B-2，ビット検出。清掃作業。奥村補佐来跡。
5日	火	A-1・2，B-1区掘り下げ。B-1区に土器片・礫等が出土している。有島教育長・県社会教育課長早川氏・阿世知社会教育課長来跡。発掘体験学習（安城小学校3名）
6日	水	A-1・2，B-1・2区掘り下げ。特にB-1区より土器片，石器出土する。A-1・2，B-1・2区平板・レベル遺物取上げ。ブルーシートをはる。
7日	木	台風接近のため，ベルトコンベア移動，配電盤整理，集石出土地にブルーシート被せ土納を置く。仮設トイレ2基風対策のためロープをはり，養生を行う。
18日	月	A-1，B-1区掘り下げ。土器，石器出土。
19日	火	A・B-1・2区掘り下げ。東・西側土層断面清掃。
21日	木	A-2区掘り下げ。平板・レベル遺物取り上げ。
22日	金	A-2区掘り下げ。西側壁面清掃。
25日	月	西側土層断面図作成。集石検出作業。A-2・3区掘り下げ。
26日	火	A・B-3区掘り下げ。磨製石鏃出土。西側土層断面図作成。集石実測作業開始。
27日	水	A・B-3区掘り下げ。集石実測作業。
29日	金	A・B-3区掘り下げ。集石実測作業。
9月1日	月	A-3区掘り下げ。平板・レベル遺物取り上げ。集石実測作業。阿世知社会教育課長・奥村補佐来跡。
2日	火	A-3区掘り下げ。東・西側壁面清掃。集石実測作業。
3日	水	A・B-2区掘り下げ。西側土層断面図作成。市税務課戸川氏・浜尾氏，市教育委員会宮田氏，種子島開発総合センター尾形氏来跡。
4日	木	A・B-2区掘り下げ。安城中教頭来跡。
5日	金	A・B-1・2・3区清掃。道具後片付け。阿世知社会教育課長来跡。
8日	月	調査地埋め戻し。道具後片付け。
9日	火	調査地埋め戻し。道具後片付け。
10日	水	調査地埋め戻し。調査事務所撤去。調査終了。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置

種子島は本土最南端の佐多岬から大隅海峡を隔てた、東南約40kmの海上にあり、南北52km、東西12kmの北北東から南南西に細長く伸びた、最高標高でも282.3mしかない低平な細長い島で、地形は丘陵性の山地、海岸段丘、河川付近の沖積低地からなり、西方に位置する屋久島とは対照的である。また、西海岸部には比較的砂丘が発達しているが、東海岸は断崖に富んでいる。行政区は北から西之表市・中種子町・南種子町と1市2町からなる。

東前平遺跡は西之表市の東南海岸部安城地区大野の標高約56mの海岸段丘上に位置し、遺跡の東側には太平洋を望むことができる。遺跡の周辺には川が流れており、周辺では一段高い位置に遺跡は形成されている。台地の先端部分に遺跡は形成されている。

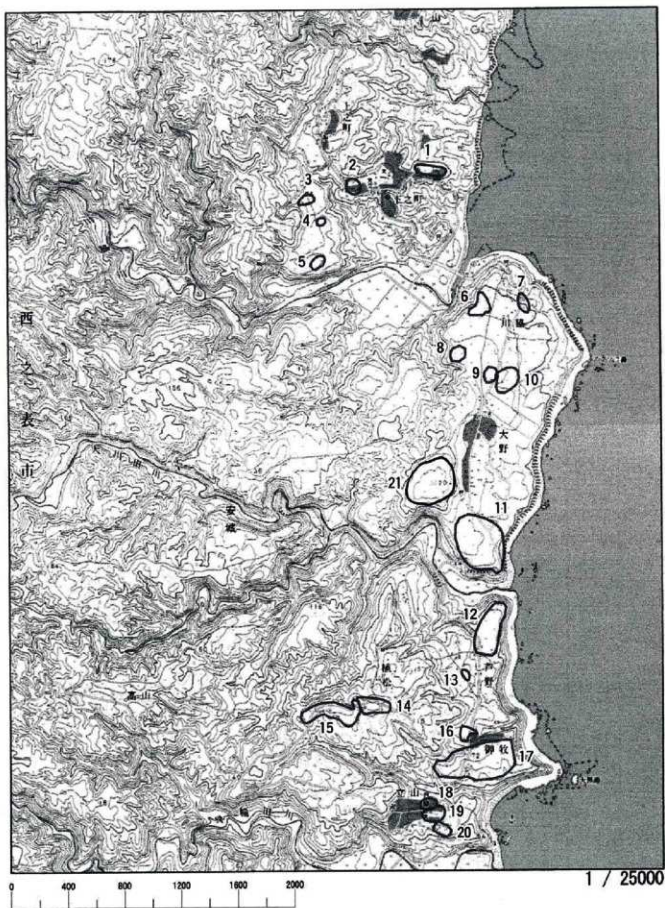
種子島の遺跡について述べると、約3万年前の旧石器時代の遺跡である横峯遺跡（南種子町）・立切遺跡（中種子町）や、細石核・細石刃が採集された湊遺跡・大中峯遺跡（西之表市）があり、奥ノ仁田遺跡（西之表市）の調査によって縄文時代草創期の遺跡が初めて確認され、その後鬼ヶ野遺跡や三角山遺跡（中種子町）の調査で縄文時代草創期の住居址や多数の遺構、遺物が発見され注目を浴びている。その後の縄文時代早期・前期の遺跡も島内各地で確認されているが、中期の遺物の報告例は少ない。後期の遺跡は指宿式・市来式などが出土する遺跡が島内各地で確認されており、納骨式土器の標識遺跡である納骨遺跡（西之表市）、特異な配石遺構が多数検出された藤平小田遺跡（南種子町）多数の磨石・石皿が出土し住居址が検出された浅川牧遺跡（西之表市）等がある。

弥生時代は下剥峯遺跡・田ノ脇遺跡・馬毛島椎ノ木遺跡（西之表市）や、多数の人骨と貝製品が出土した広田遺跡（南種子町）、覆石墓・人骨が出土した鳥ノ峯遺跡（中種子町）などがあり、中期頃の土器片が出土する遺跡も確認されているが、埋葬址が多いのが特徴的である。

古墳時代に属すると思われる遺跡は上能野貝塚（西之表市）などがある。種子島において、弥生時代以降の遺跡は縄文時代の遺跡に比べ極端に少ないため、未解明な点が多いのが現状である。

第2節 遺跡の環境

東前平遺跡が所在する西之表市の東南海岸側、とくに安城・立山地区は近年開発事業のため発掘調査が毎年実施され、良好な資料が出土している。特に、奥ノ仁田遺跡・鬼ヶ野遺跡は縄文時代草創期（約12,000年前）の遺跡であり、奥ノ仁田遺跡の出土品は県の文化財に指定された。平成13年に調査が行われた鬼ヶ野遺跡からは堅穴住居跡や多数の遺構が検出され、また石鏃が約400点出土し話題となった。今後も縄文時代草創期の遺跡は増加していくものと思われ、縄文時代の成り立ちを考える上で、重要な場所である。



第5図 東前平遺跡と周辺遺跡図

第1表 東前平遺跡周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
1	仮屋園	西之表市安城平山	縄文時代早期	平成10年農政分布調査
2	通利山	西之表市安城上之町	縄文時代	平成13年県道分布調査 平成15年試掘調査
3	鬼ヶ野A	西之表市安城上之町	縄文時代	平成12年確認調査
4	鬼ヶ野B	西之表市安城上之町	縄文時代	平成12年確認調査
5	鬼ヶ野	西之表市安城上之町	縄文時代草創期	平成13年発掘調査
6	日守C	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成6年確認調査
7	三本松	西之表市安城川脇	縄文時代早期	平成17年発掘調査
8	日守B	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成6年確認調査
9	日守	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成7・8年発掘調査
10	長迫	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成13年県道分布調査 平成13年試掘調査
11	東前平	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成14・15年発掘調査 本報告書
12	芦野	西之表市立山芦野	縄文時代早期	平成16年発掘調査
13	九郎三ヶ門	西之表市立山芦野	縄文時代	平成3年農政分布調査
14	奥嵐	西之表市立山植松	縄文時代早期	平成5年発掘調査
15	奥ノ仁田	西之表市立山植松	縄文時代草創期・早期	平成5年発掘調査 出土品は県文化財に指定
16	尾呂ノ平	西之表市立山御牧	縄文時代	平成13年県道分布調査
17	長崎	西之表市立山	縄文時代	平成13年県道分布調査
18	中園A	西之表市立山	縄文時代	平成13年県道分布調査
19	中園B	西之表市立山	縄文時代	平成13年県道分布調査
20	下ノ平	西之表市立山	縄文時代	平成13年県道分布調査
21	鍛ノ刃	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成17年発掘調査

第Ⅲ章 発掘調査の概要

第1節 調査の概要

(Ⅱ地点)

調査は工事設計図面をもとに範囲を決定し、表土からアカホヤ火山灰層までを重機で取り除いた後、人力で掘り下げを行った。確認調査の結果から第Ⅴ層(暗褐色土)以下からは遺物・遺構は確認されなかったため、今回の調査の最下層をⅤ層とした。調査面積は約120㎡である。

(Ⅰ地点)

調査は、表土からアカホヤ火山灰層までを重機で取り除いた後、調査グリッドを設置し、人力で掘り下げを行った。確認調査の結果から第Ⅴ層(暗褐色土)以下からは遺物・遺構は確認されなかったため、今回の調査の最下層をⅤ層とした。ただし、確認調査を実施できなかった場所についてはトレンチ調査を行った。トレンチ調査は表土を重機で除去した後、人力で掘り下げを行った。調査面積は約1,600㎡である。

第2節 層位

土層は場所によって、一部の層が欠落している部分もあるが、基本的には下記のとおりである。

I 層 表土

II 層 黒色土

III 層 黄橙色火山灰層 アカホヤ火山灰層 約6,300年前の鬼界カルデラ噴出物

III b (アカホヤ二次)

III a (アカホヤ一次)

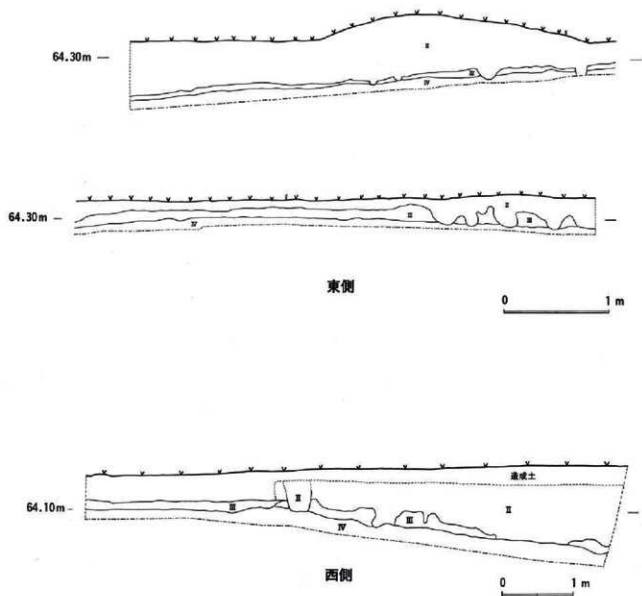
IV 層 ベージュ色ローム土 遺物包含層(縄文時代早期) 色調によって二層に分層できるところもある。

IV a (黒褐色強い)

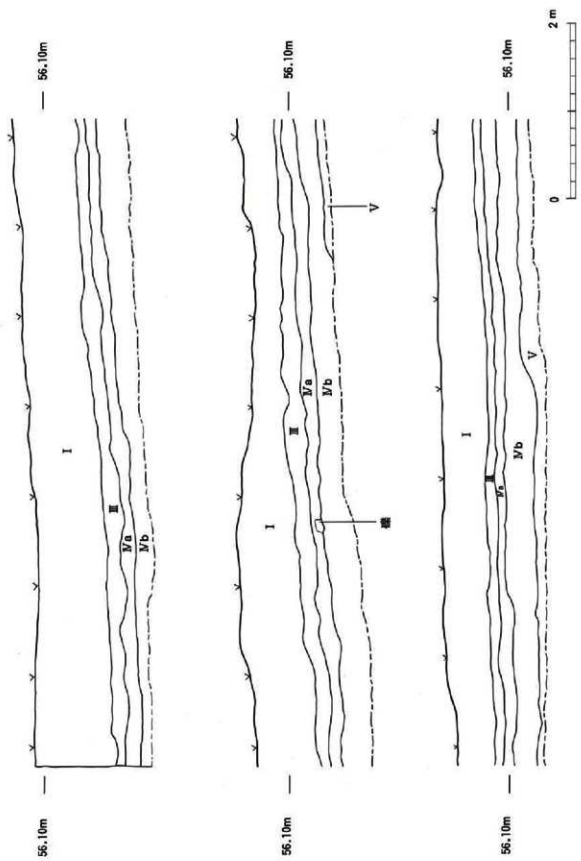
IV b (ベージュ色)

V 層 暗褐色土 場所によってはⅥ層の明茶褐色土と漸移している箇所もみられる。一部下位に小指から親指大の暗黄色のパミスが混雑する。サツマ火山灰と思われる。

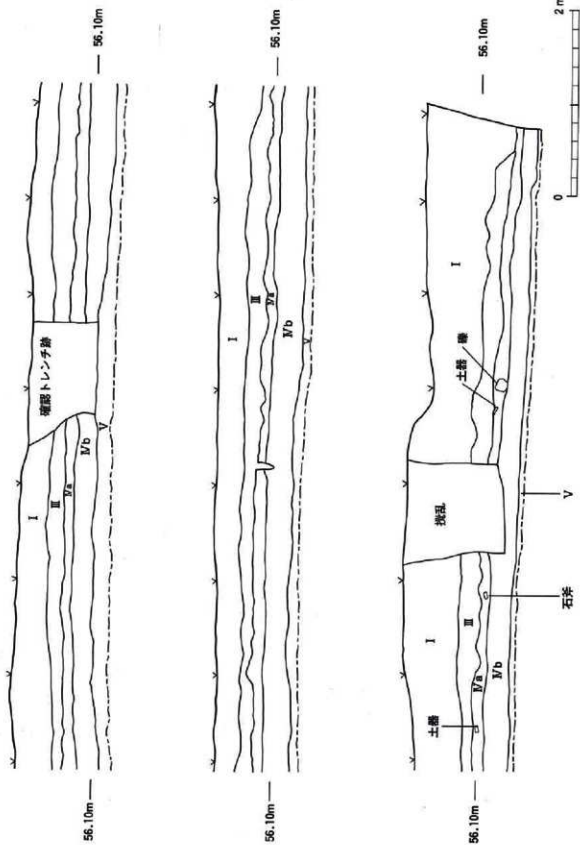
VI 層 ベージュ色粘質土 非常に粘質がある。(場所によっては、黄褐色が強くなる。)



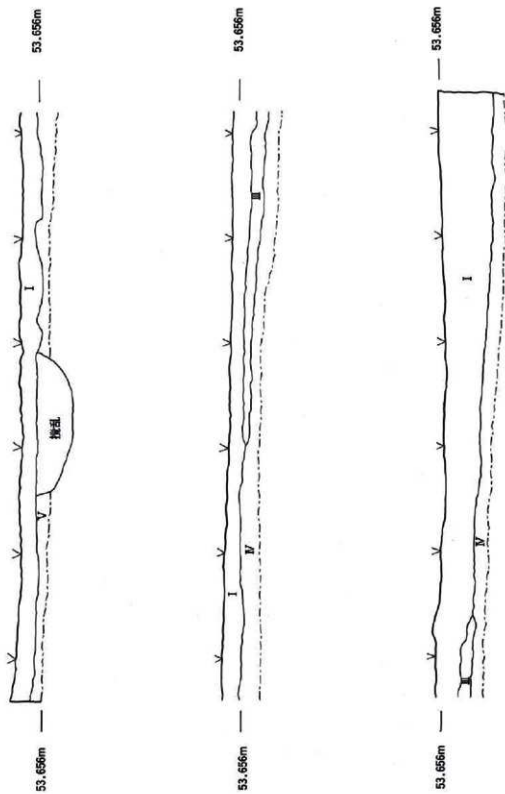
第6図 II地点土層断面図



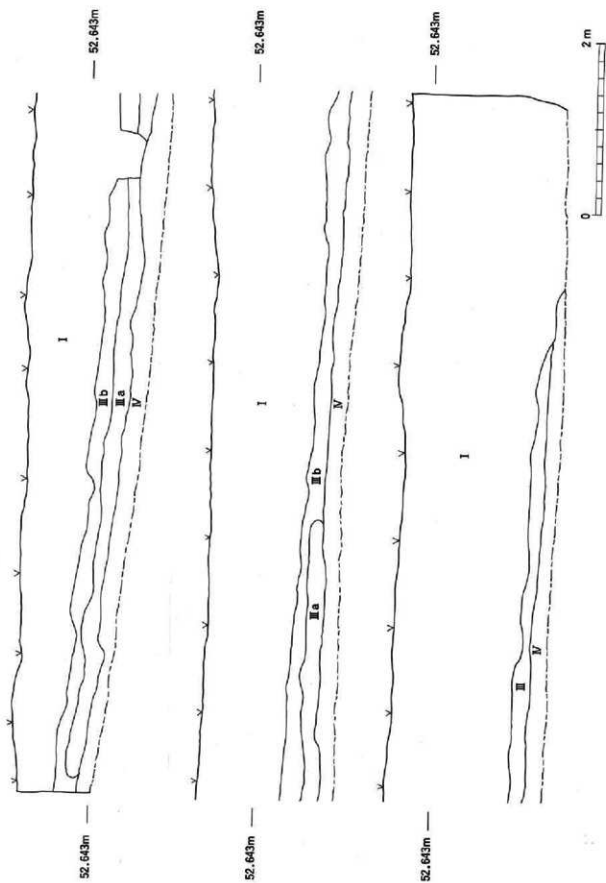
第7图 I地点西側土層断面(1)



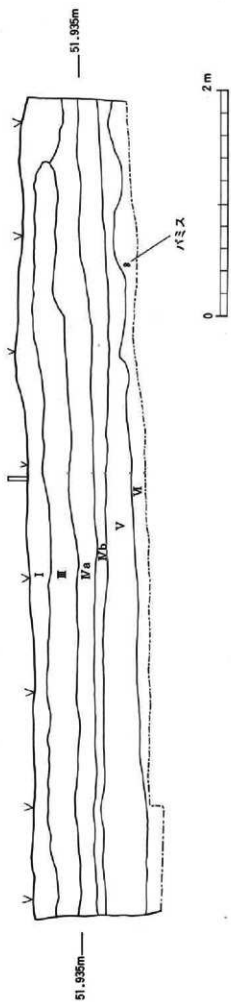
第8図 I地点西側土層断面(2)



第9図 I地点B-1区東側土層断面



第10图 I地点B-7·8区东阙土層断面



第11図 I地点B・C-12区南側土層断面

第3節 遺構

遺構は集石5基・配石2基が検出された。以下地点ごとに記述する。

(I地点)

IV層から集石4基・配石と思われるものが2基検出された。

1号集石 (第12図)

調査区の南側より検出された。大きさは1.5m×1.5mほどである。約50個の礫で構成されているが、全体的にばらけた感じである。礫は20cm～30cm程の比較的大きいものが見られ、熱を受けて赤化し、破砕しているものもある。特に中央部は、礫の赤化が著しい。下部の掘り込みは確認されなかった。

2号集石 (第12図)

1号集石の西側に隣接するような形で検出された。大きさは1.5m×1.2mの範囲に礫が集中し形はほぼ円形となる。手のひらほどの大きさの砂岩約60個から構成されている。礫の大半は熱を受け赤化している。中心部の土は黒っぽくなっていたが、炭化物等は検出されなかった。

3号集石 (第12図)

2号集石の北側より検出された。確認調査時に既に検出されていた集石である。アカホヤ火山灰に覆われるような形で検出された。0.8m×0.6mのほぼ円形で、他の集石に比べると小ぶりである。礫は砂岩で約30個から構成されている。熱により赤化しているものが半数を占める。掘り込みは確認されなかった。

4号集石 (第12図)

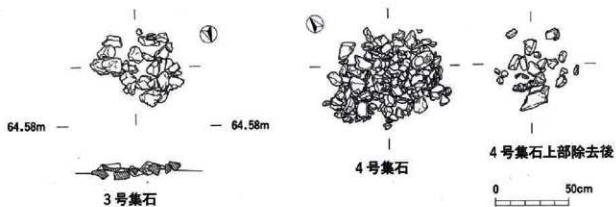
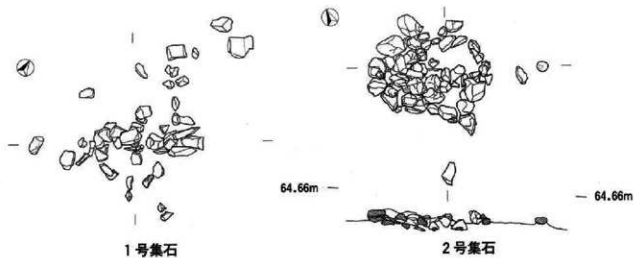
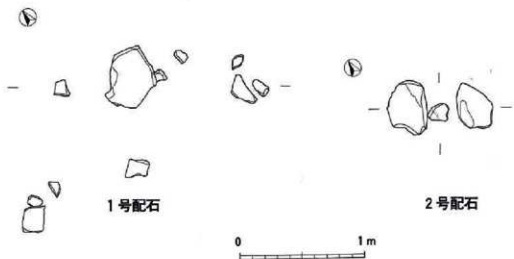
調査区の北側土層断面に入り込むような形で検出された。大きさは0.8m×0.8mでほぼ円形である。他の集石と比べると礫がぎっしり詰まっている。礫は手のひらほどの砂岩が大部分を占め、熱を受け赤化している。約150個の礫で構成されている。中心部からは炭化物が検出された。

1号配石 (第12図)

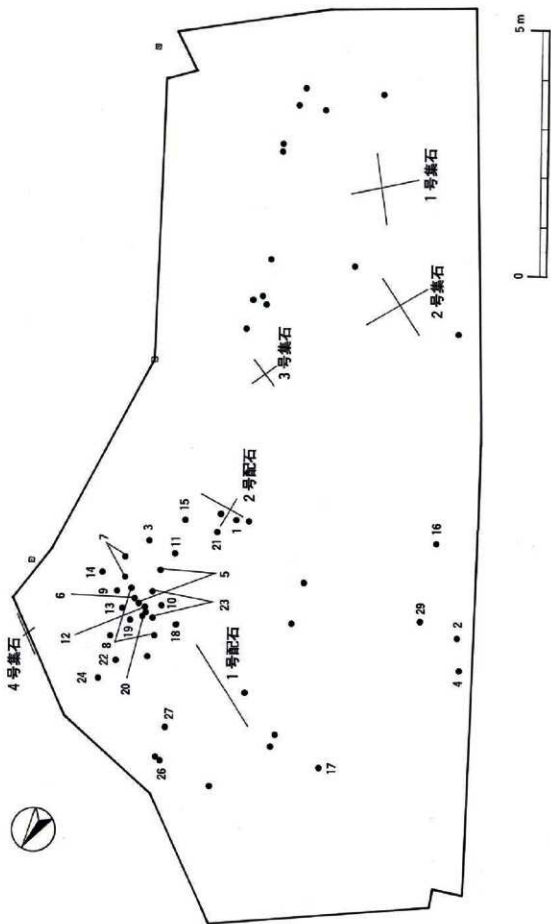
調査区の西側でほぼ東西へ、1直線状に礫が出土した。範囲は約2mで、ややばらけた形で7個の礫が並ぶように検出されたため配石とした。礫はいずれも砂岩であり、全て使用痕は見られなかったが、2個の礫は熱をうけた可能性が見られる。礫の大きさは拳ほどから50cmを超えるものまであり、大きさは一定していない。

2号配石 (第12図)

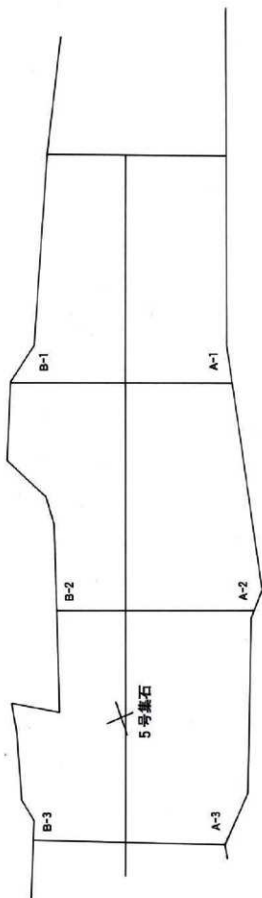
調査区のほぼ中央部に、3点の礫が1点の小さな礫をはさむような形で検出された。礫はいずれも砂岩で、大きな礫のうちの1個は砥石として使用した痕跡が見られ、一部赤化した部分もある。



第12図 遺構



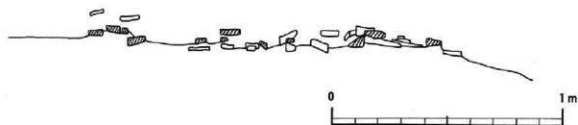
第13图 II 地点遗物配置图・全遗物出土状况



第14图 5号集石配置图

55.70m —

— 55.70m



第15图 5号集石

(I地点)

B-3区で集石が1基検出され、5号集石とした。検出面の層は第IV層である。

5号集石(第15図)

1.6m×2.0mの間に礫が集中し、その大部分は中心部に集まる。構成される礫は全て砂岩であり、特に中心部の礫は炎熱を受け著しく赤化し、破碎しているものも見受けられる。下位の礫は20cmから30cm程の大きさで、上部の礫は拳大のものが多い。集石内からは炭水物が多数検出された。礫約70個から構成されている。

A-2区北側、西側土層断面側でIV層面より遺物が集中して出土し、遺構の可能性が考えられ、詳細な調査を行ったが遺構は検出されなかった。

B-2区で直径約5cmから10cmほどのビットが、IV層下位面で数基検出された。全てのビットを半截又は4分の1カットして土層を精査した結果、いずれも樹根であると判断した。

第4節 遺物

遺物は土器片と石器類が出土した。出土層は全てIV層である。時期区分では縄文時代早期に位置づけられるものである。

(II地点出土遺物)

遺物はIV層より土器・石器類が出土した。出土した層位及び土器の文様から縄文時代早期のものである。番号をつけて取り上げた遺物は55点になった。遺物の出土量はバンケース5箱分である。

① 土器類(第16図～第17図 1～25)

土器の文様・器形などから大きく2つの類に分類し、その他磨耗がはげしく文様がはっきりしないもの、あるいは型式不明なものは一括してまとめた。

I類土器(第16図 1～4)

1～4が該当する。1は角筒形の器形になると思われ、貝殻条痕文の上に直線状の貝殻刺突文を重ねる2重施文を行っており、上半部分で2重施文は止まっている。2・3は底部付近の破片である。4は底部である。

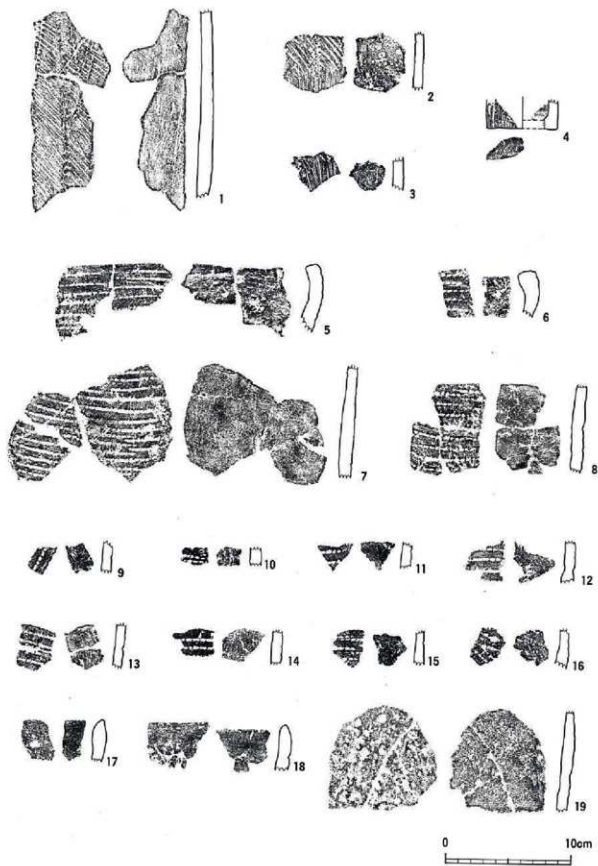
II類土器(第16図 5～16)

口縁部は内湾する。口唇部は平坦であり、やや内側に肥厚する。文様は貝殻刺突文のみで構成されている。

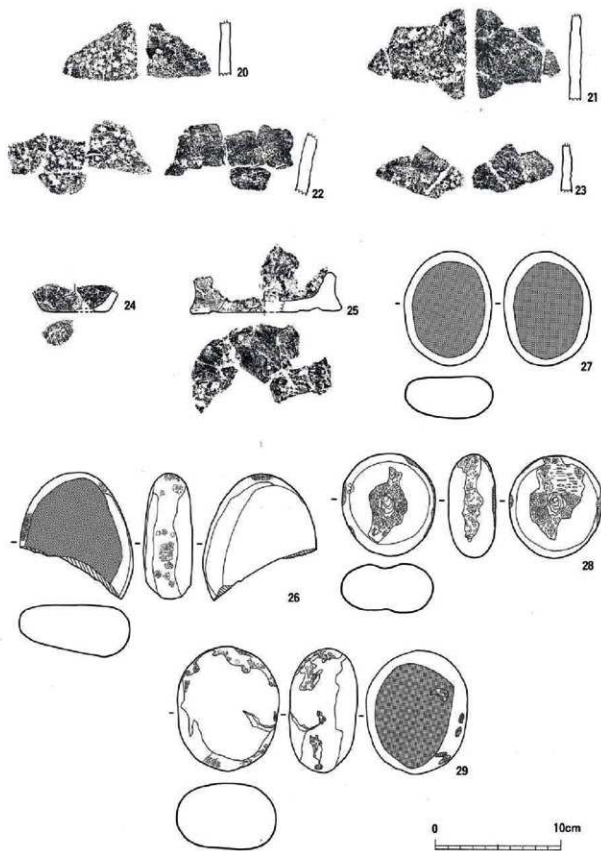
III類土器(第16図～第17図 17～25)

III類土器としたものは、文様不明な土器あるいは型式不明な土器、底部を一括した。

17・18は口縁部であるが文様がはっきりしない。19から23は同一個体と思われるが、磨耗が激し



第16图 II地点出土遺物(1)



第17图 I地点出土遺物2)

第2表 土器觀察表

挿図	番号	取上番号	層	色 調		胎 土	備 考
				外 面	内 面		
16	1	25・28	IV	黄茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・砂粒	角筒形
	2	46	IV	赤茶褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒	
	3	53	IV	赤茶褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒	
	4	46	IV	赤茶褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒	底部
	5	2・7	IV	灰黄茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・砂粒	口縁部
	6	7	IV	黄茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・砂粒	口縁部
	7	1・6	IV	黄茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・砂粒	
	8	7・15	IV	黄茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・砂粒	
	9	4	IV	黄茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・砂粒	
	10	12	IV	黄茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・砂粒	
	11	4	IV	黄茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・砂粒	
	12	11	IV	灰黄茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・砂粒	
	13	9・12	IV	黄茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・砂粒	
	14	4	IV	黄茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・砂粒	
	15	27	IV	灰黄茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・砂粒	
	16	40	IV	赤茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・砂粒	
	17	23	IV	黑茶褐色	黑褐色	石英・長石・砂粒・輝石	口縁部
	18	7	IV	黑茶褐色	黑褐色	石英・長石・砂粒・輝石	口縁部
	19	29	IV	灰黄茶褐色	灰黑褐色	石英・長石・砂粒・輝石	
17	20	10	IV	灰黄茶褐色	黑褐色	石英・長石・砂粒・輝石	
	21	2・9	IV	灰黄茶褐色	黑褐色	石英・長石・砂粒・輝石	
	22	7・9・17	IV	灰黄茶褐色	黑褐色	石英・長石・砂粒・輝石	
	23	3・12	IV	灰黄茶褐色	黑褐色	石英・長石・砂粒・輝石	
	24	19	IV	灰黄茶褐色	黑褐色	石英・長石・砂粒・輝石	底部
	25	5・9	IV	黄茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・砂粒	底部

第3表 石器観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	取上 番号	出土 層	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石材	備 考
17	26	磨 石	21	IV	7.5	9	3.7	410	砂岩	
	27	磨 石	20	IV	9.2	7.1	3.2	325	砂岩	片面茶色に変色
	28	凹 石	2号 集石内	IV	8.2	7.5	3.3	320	砂岩	
	29	磨 石	41	IV	9.9	8	5.3	578	砂岩	

く文様が判別できなかったものである。貝殻刺突文のようにも思われるがはっきりしない。胎土に、長石・輝石・砂粒等を多量に含んでいるのが特徴である。

24・25は底部であり、24は小型の底部である。

② 石器類 (第17図 26~29)

石器類は磨り石・敲石類が5点出土した。うち図化したのは4点である。26は表面に磨面が見られ、側面には敲打痕がある。28は2号集石内に含まれていたもので、表・裏面の中心部が窪んでいる。29は表面に磨面、側面及び側縁部に敲打痕が見受けられる。石材は全て砂岩である。

(I 地点出土遺物)

遺物は第IV層より土器片・石器類が出土した。番号を付けて取上げた数は1035点である。出土状況は調査区北側より分布が集中した。土器は数種類のバリエーションがあり、文様構成や器形からIV類~IX類と6つに分類した。石器は石斧・磨石・敲石・異形石器などが出土した。遺物の出土量はパンケース30箱分である。

① 土器類 (第22図・24図~25図・27図・29図~30図・32~33図・35図 30~176)

IV類 (第22図 30~56)

IV類土器としたものは外面に山形押型文を施したものである。総数43点の出土である。30~34は山形押型文が細やかなものであり、小波状に近いものである。35~56は山形押型文が間延びしたものであり不規則な方向も見られるが、小片のため向きが不明確なものもあった。縦・斜め方向と不規則である。

V類土器 (第24図~第25図 57~103)

57~103は外面に凹線・沈線・回転刺突文を施すものである。回転刺突文には微小な山形押型文が加わるものやトゲ状の突起をもつ原体を転がしているものがある。出土土器片は小片が多い。胴部下部の屈曲が目だっており、胴部はすぼまり気味である。76~77は回転刺突文は極めて微小なものである。器形は口縁部が大きく外反し、頸部でくびれ、胴部中央よりやや下方で張り出し屈曲し、小さな平底にいたる。65は壺形土器と思われる。出土土器の主体をなすもので420点の出土である。

VI類土器 (第27図 104~111)

23点の出土である。外面に沈線文・刺突文を施すものである。口縁部は肥厚せずそのまま外反するものや突帯文を施すものもある。胴部が張る器形になるとわれ、104は頸部に長い沈線、短い沈線が組み合わさり渦状のモチーフを描いている。

VII類土器 (第29図~第30図 112~151)

109点の出土である。外面に凹線・沈線文・撚糸文を施しているものである。器形は口縁部が大きくラップ状に外反するものが主体である。

Ⅳ類土器 (第32図～第33図 152～166)

141点の出土である。外面に貝殻刺突文・沈線文を施しているものである。器形は口縁部が大きくラップ状に外反するものが主体である。

Ⅴ類土器 (第35図 167～176)

貝殻条痕文、無文土器、底部片としたものである。貝殻条痕文・無文のものは48点、底部は17点の出土であった。167は小径のやや厚みのある平底の底部から外傾しながら立ち上がり、ほぼ直線的ないしわずかに内湾気味に口縁部に向かって開く器形をもつ深鉢型土器である。外面は条痕文が施される。内面はナデ調整で、刷毛目状の工具跡が見られる。170は167と同一個体と思われる。

② 石器類 (第38図～第41図 177～218)

石器類は石鏃・剥片類・石核・石斧・異形石器・磨石・台石、石皿類が出土した。

石鏃 (第38図 177～191)

177～192は石鏃である。177～178は磨製石鏃である。全面を丁寧に磨きあげ、形は二等辺三角形を呈し基部に抉りはない。石材はいずれも頁岩である。179～185は抉りのあるものである。179は脚部両端から深い三角形の明瞭な抉りが入る。181は周辺が鋸歯状に剥離される。漁労具の可能性も考えられる。184～187・189～191は欠損品または未製品と思われる。184・187～189の石材は姫島産の黒曜石であり他は全て頁岩である。

剥片 (第38図 192～193)

剥片類は2点の出土である。石材は何れも黒曜石であり、192は姫島産・193は腰岳産のものである。連続した細かい剥離痕が見受けられる。

石核 (第38図 194)

石核は1点の出土であった。石材はチャートである。全体にわたり剥離痕が見受けられる。

スクレーパー (第40図 208)

砂岩鏃の剥片に細かい調整を施し、刃部を形成しようとしているものである。押圧剥離による調整が見受けられる。調整途中の段階のものと思われる。

石斧 (第38図～第39図 196～205)

磨かれた鋭い刃部を持つ磨製石斧と打製石斧が出土した。198は刃部が若干屈曲しており、ナタ状を呈するものである。200～202は全長が8cm以下の小型の磨製石斧であり、木材等を加工するために用いられたものと思われる。203は打製石斧であるが、形状から土掘り具としての使用が考えられる。出土した石斧の石材はホルンフェルスまたは頁岩が使用されている。

異形石器 (第39図 206・207)

異形石器と思われるものが2点出土している。

206は大型の石斧とも思われるが重量が非常に重い。外周・側面に調整による打痕がみられるが、刃部は製作していない。祭祀用のものとも考えられるが、類例が少ないため用途を判断することはできなかった。石材はホルンフェルスである。

207は三角山遺跡(種子島 中種子町)で出土した通称トロトロ石器というものに類似する資料である。石材はチャートで、一見石鏃にも見られるが、その形態から石鏃としての用途はもたないものである。

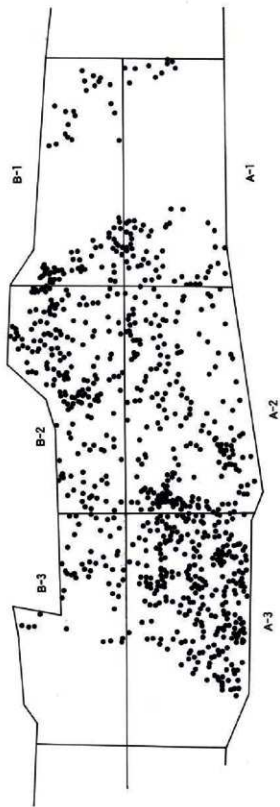
磨石類 (第40図 209)

磨石類の出土は少なく1点のみの掲載となった。石材は砂岩で、磨面が顕著であり、微少の敲打痕が見受けられる。

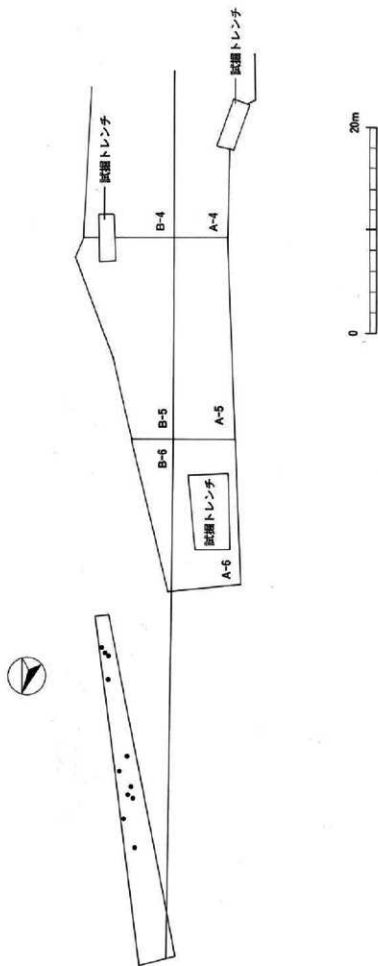
台石・石皿類 (第40図～第41図 210～218)

台石・石皿類は9点を図化した。大型の礫の出土も多数あったが、使用痕等が見受けられない自然礫であった。実測図の網掛け部分は平滑面を表している。台石・石皿類の石材は全て砂岩である。

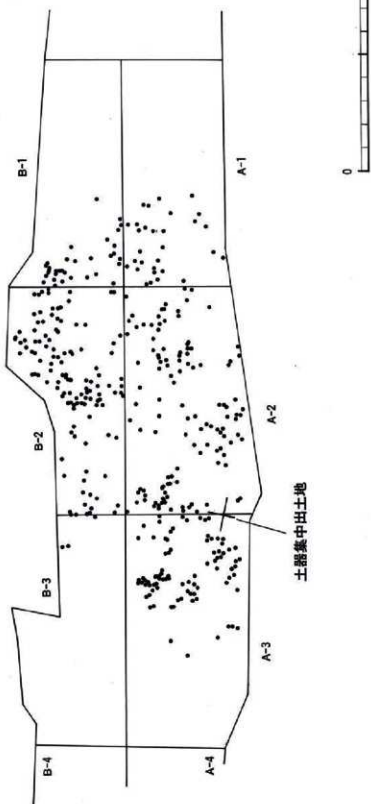
210は敲打痕・磨面・平滑面が見受けられる。211～214は平滑面のみで石皿としての用途が考えられる。215は中心部に平滑面、側縁部に敲打痕が見える。216は掘き出し口をもった石皿である。217は敲打痕、平滑面をもつものであるが、平滑面は全体には見られず、部分的である。218は最大長・最大幅が約50cm重量は約34kgに及ぶ、非常に大型の石皿である。中心部右側には円形のはっきりした敲打痕があり、左側全体にわたって平滑面が顕著である。



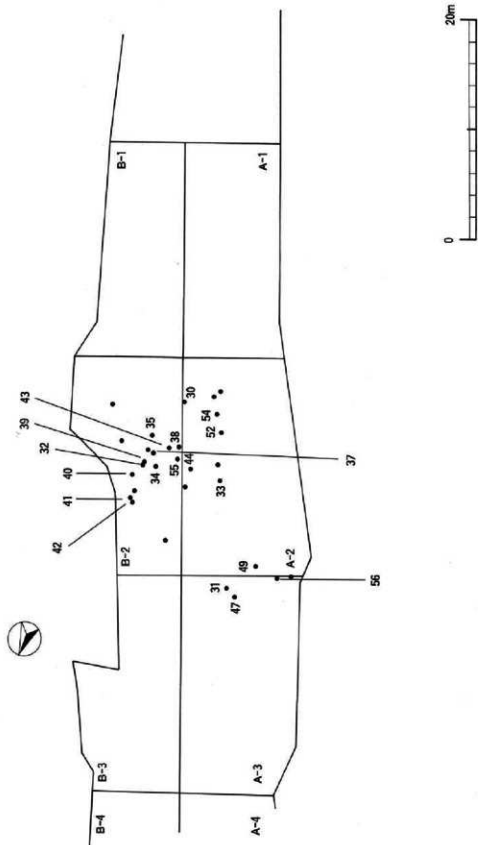
第18图 I 地点全遺物出土状況



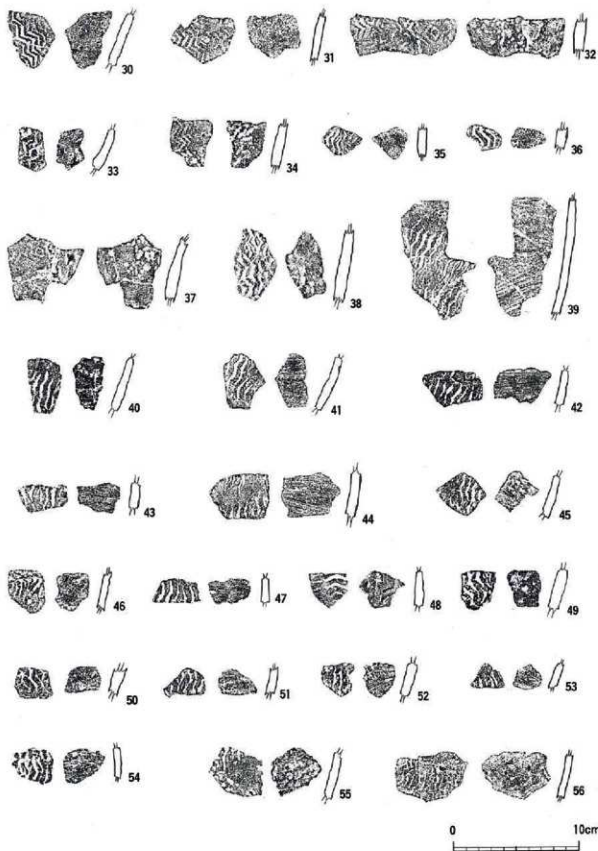
第19図 I地点全遺物出土状況



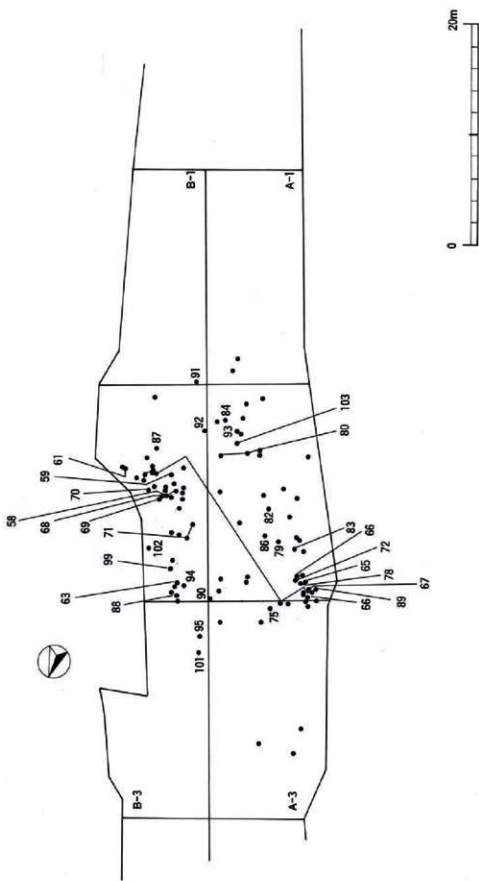
第20图 I 地点全土器出土状況



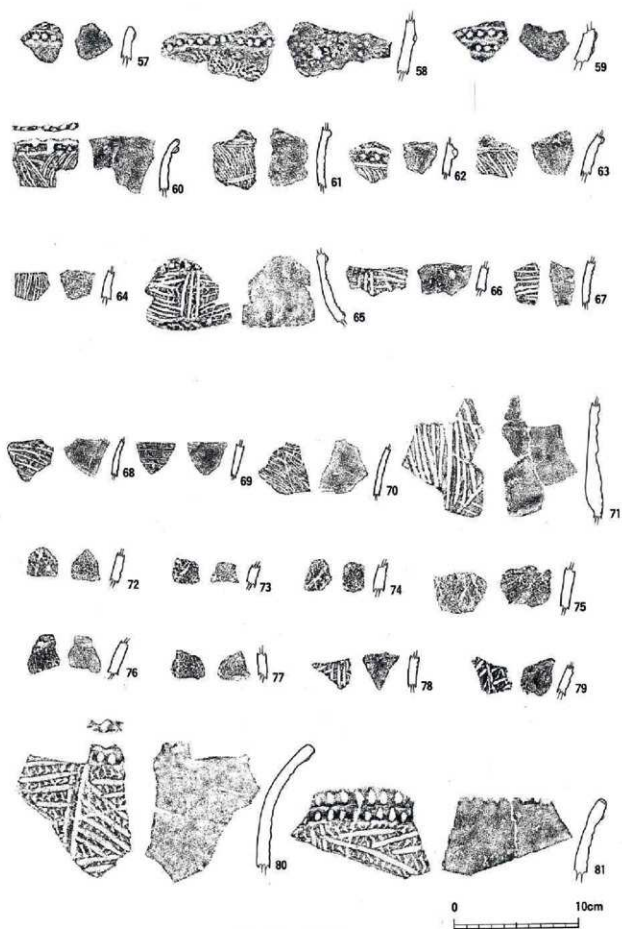
第21图 M/ 瓦土器出土状況



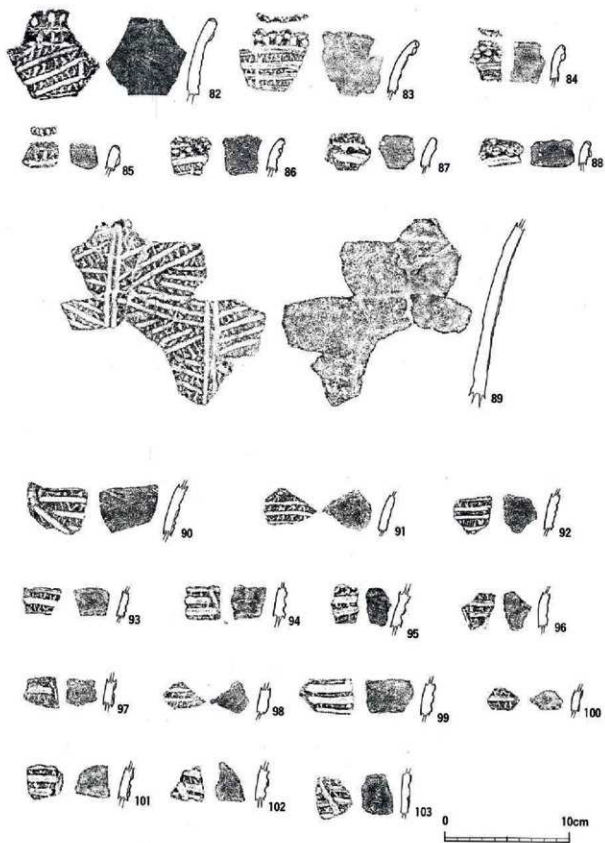
第22図 出土遺物(1)



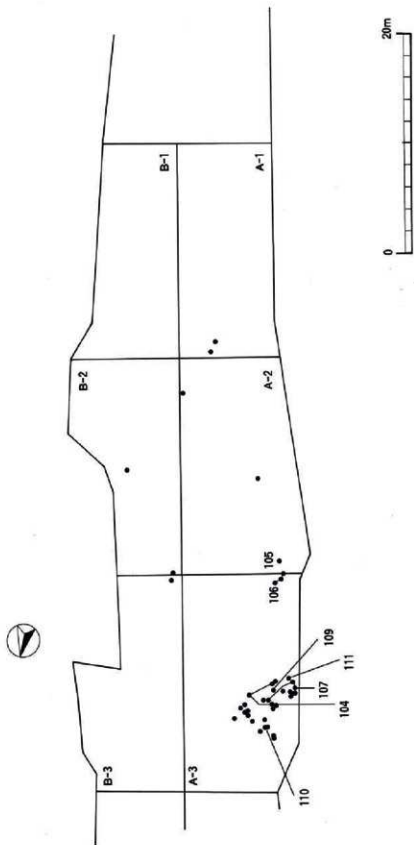
第23図 V類土器出土状況



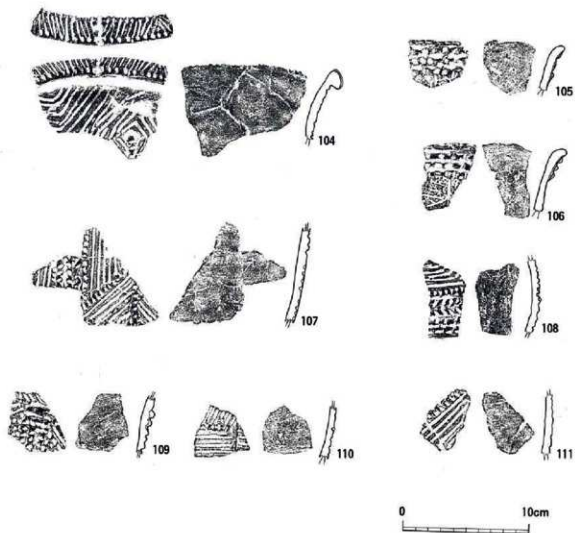
第24図 出土遺物(2)



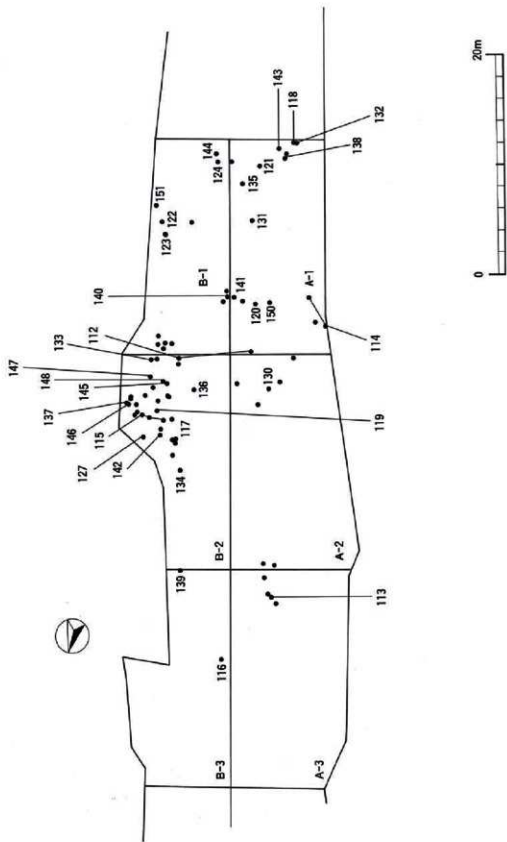
第25図 出土遺物(3)



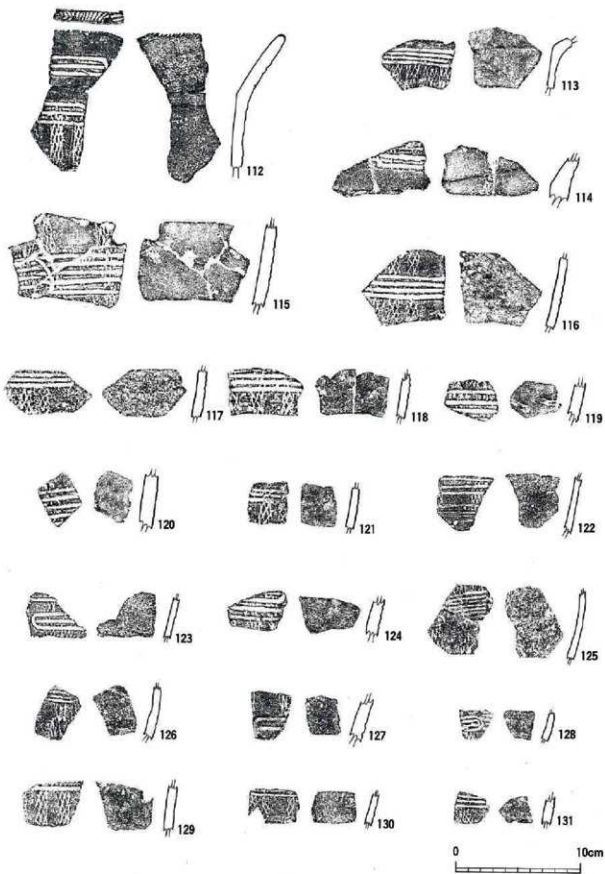
第26図 V類土器出土状況



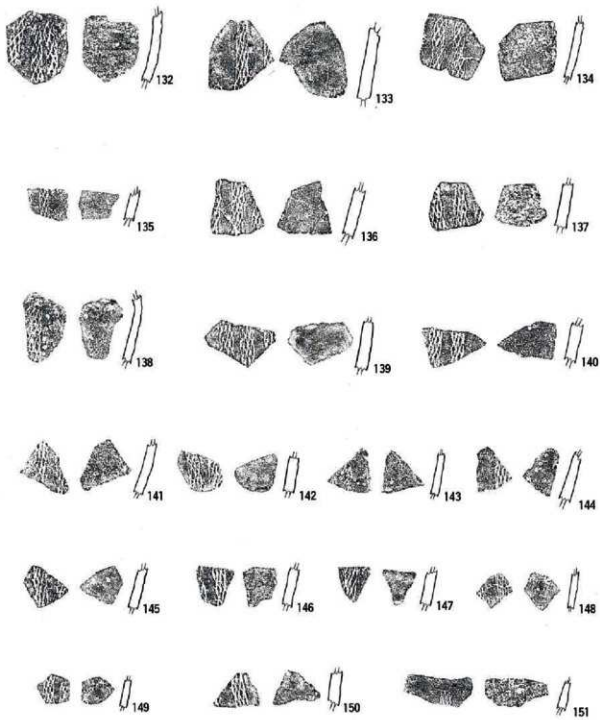
第27図 出土遺物(4)



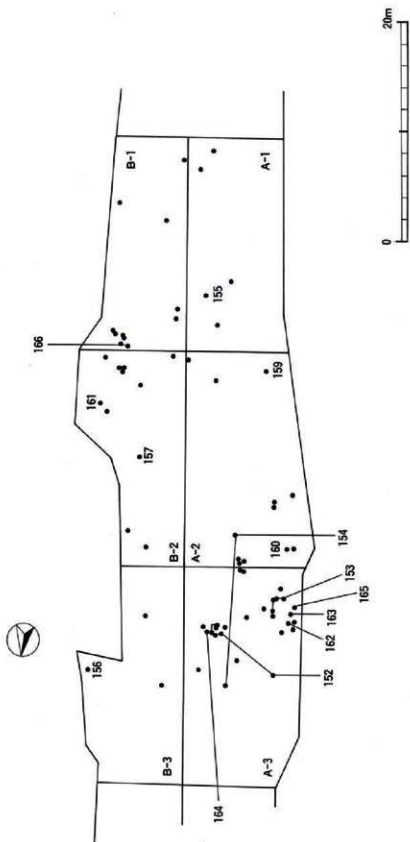
第28图 V型土器出土状況



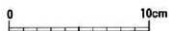
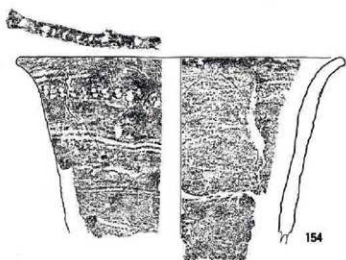
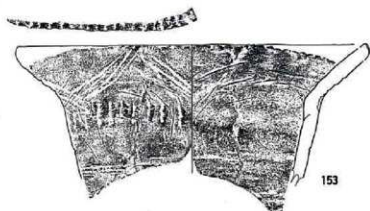
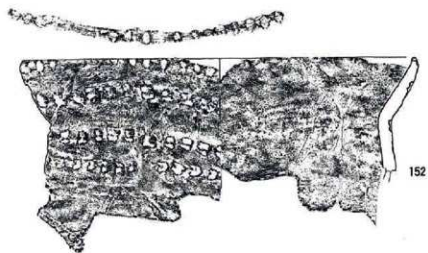
第29图 出土遺物(5)



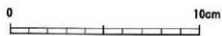
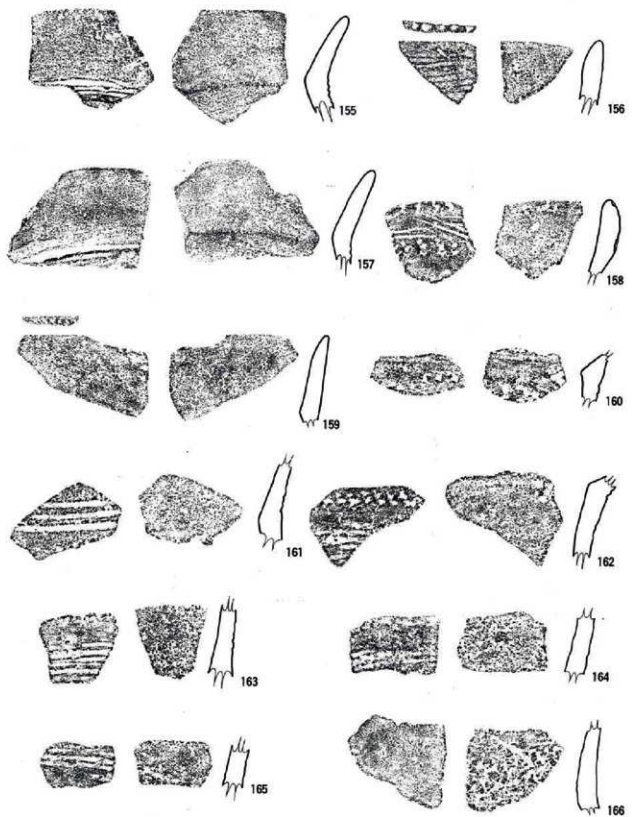
第30圖 出土遺物(6)



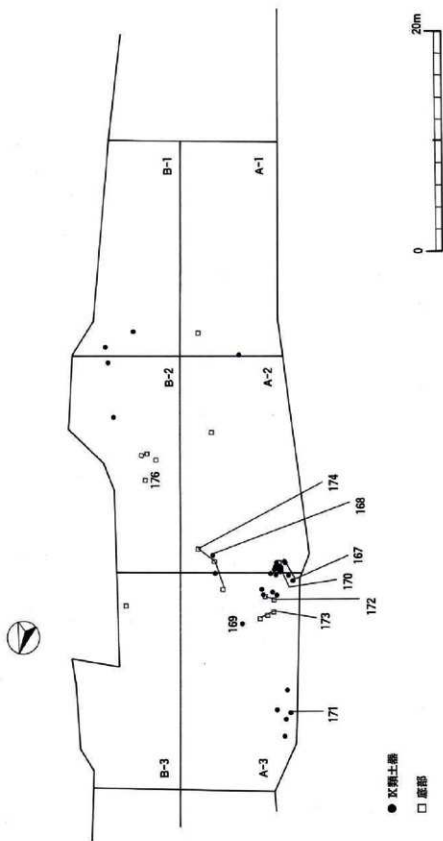
第31図 遺跡土器出土状況



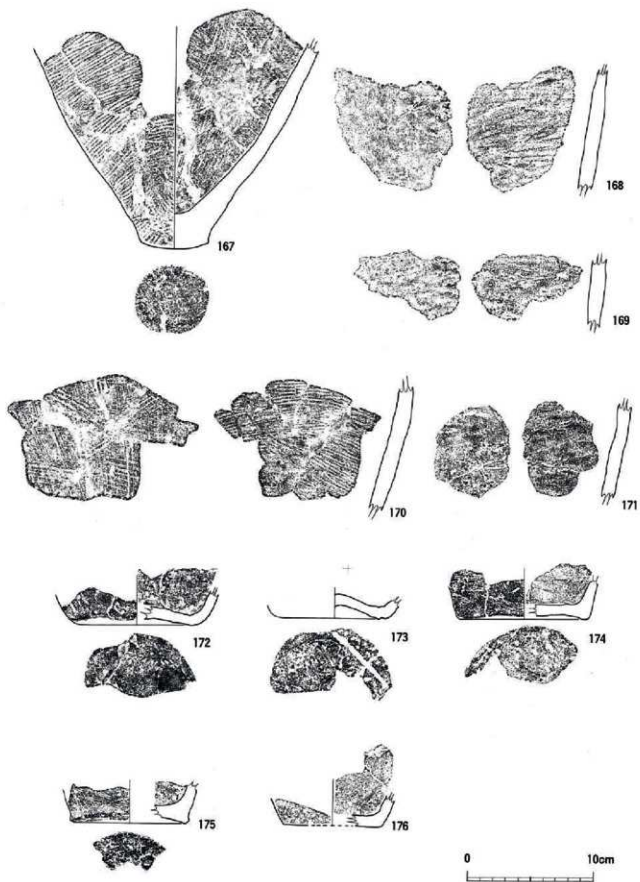
第32図 出土遺物(7)



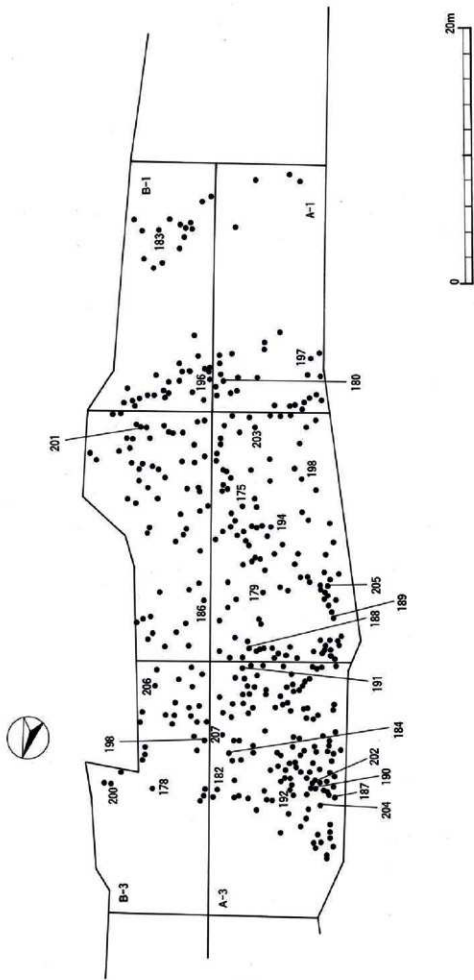
第33图 出土遺物(8)



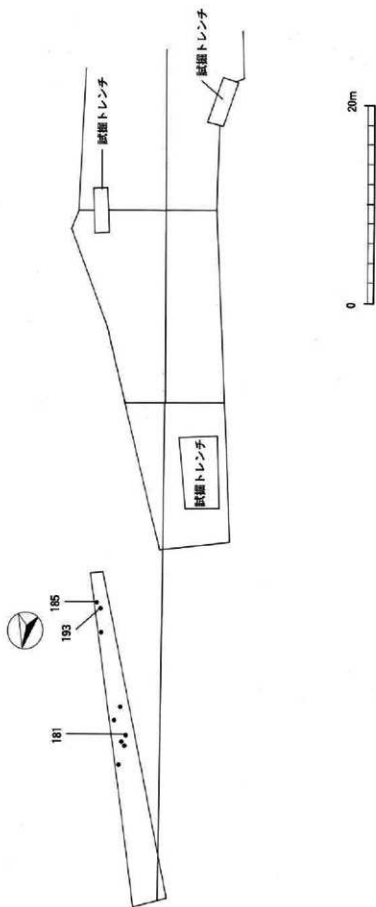
第34図 瓦類土器・底部出土状況



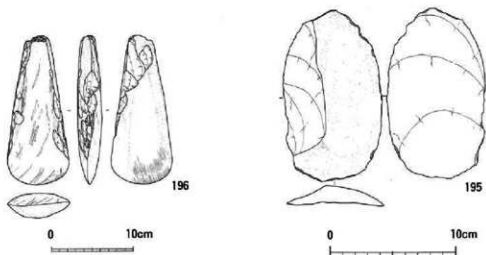
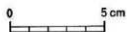
第35図 出土遺物(9)



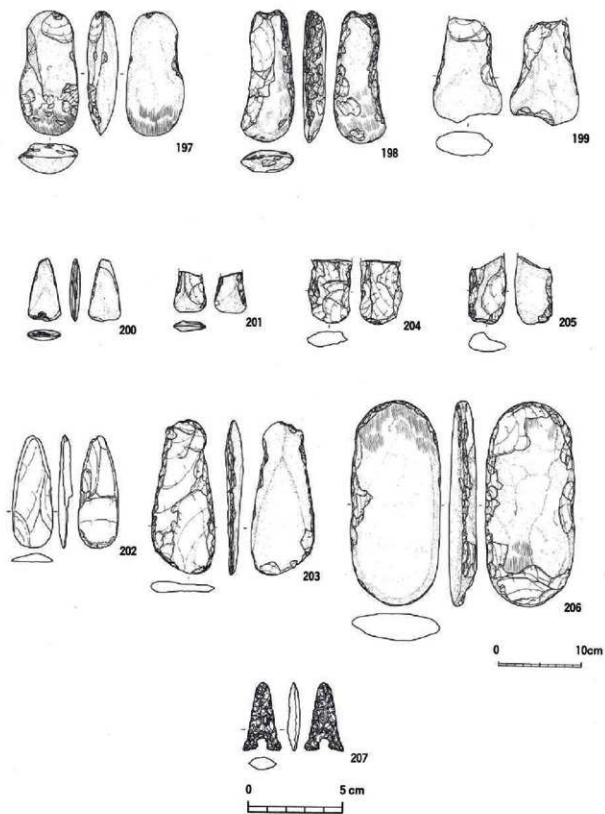
第36图 I 地点全石器出土状况



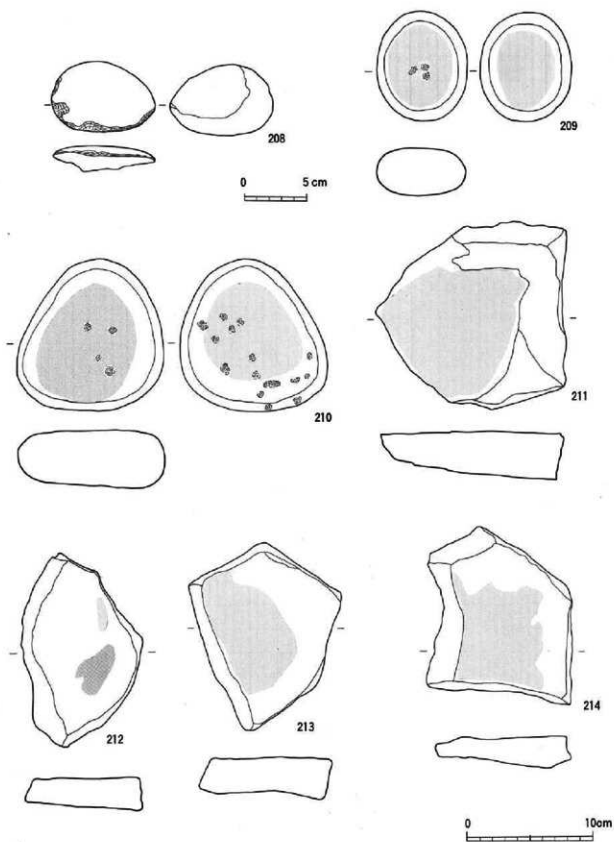
第37図 I 地点全石器類出土状況



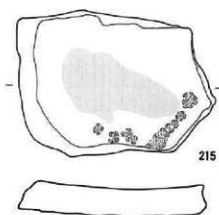
第38图 出土遺物(10)



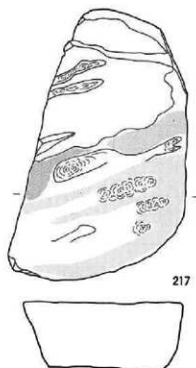
第39圖 出土遺物(1)



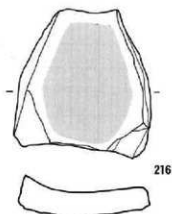
第40図 出土遺物(12)



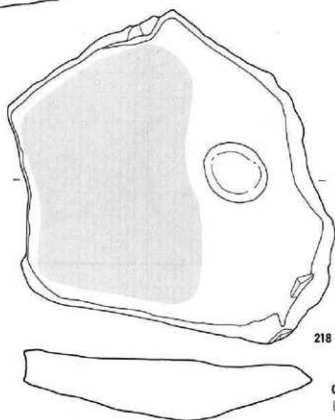
215



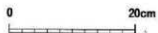
217



216



218



第41圖 出土遺物(14)

第4表 土器観察表(1)

挿図	番号	出土区	取上番号	層	色 調		胎 土				備 考	
					外 面	内 面	石 灰	長 石	砂 粒	雲 母		礫
22	30	A2・B2	270	IV	赤茶褐色	茶褐色	○	○	○			
	31	A3	217	IV	乳茶褐色	黒褐色	○	○	○			
	32	B2	109 306	IV	乳茶褐色	赤茶褐色	○	○	○	○		
	33	A2	911	IV	乳茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○		
	34	B2	870	IV	黒茶褐色	茶褐色	○	○	○			
	35	B2	288	IV	茶褐色	茶褐色	○	○	○			
	36	A2	一括	IV	茶褐色	茶褐色	○	○	○	○		
	37	B2	219 976	IV	茶褐色	黒褐色	○	○	○	○		
	38	B2	282	IV	乳茶褐色	黒褐色	○	○	○	○		
	39	B2	872	IV	茶褐色	茶褐色	○	○	○	○		
	40	B2	297	IV	茶褐色	茶褐色	○	○	○	○		
	41	B2	71	IV	赤茶褐色	黒茶褐色	○	○	○	○		
	42	B2	137	IV	乳茶褐色	黒褐色	○	○	○	○		
	43	B2	280	IV	赤茶褐色	黒茶褐色	○	○	○	○		
	44	A2	277	IV	茶褐色	黒褐色	○	○	○	○		
	45	B2	一括	IV	乳茶褐色	黒茶褐色	○	○	○	○		
	46	A2・A3	一括	IV	乳茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○	○	
	47	A3	552	IV	乳茶褐色	黒茶褐色	○	○	○	○	○	
	48	A2	一括	IV	乳茶褐色	黒茶褐色	○	○	○	○	○	
	49	A2	722	IV	乳茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○	○	
	50	A2・B2	一括	IV	茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○	○	
	51	A3	2 3	IV	茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○	○	
52	A2	261	IV	赤茶褐色	黒褐色	○	○	○	○	○		
53	A2・B2	一括	IV	乳茶褐色	黒茶褐色	○	○	○	○	○		
54	A2	265	IV	赤茶褐色	黒褐色	○	○	○	○	○		
55	B2	279	IV	茶褐色	黒茶褐色	○	○	○	○	○		
56	A2・A3	845 689	IV	乳茶褐色	茶褐色	○	○	○	○	○		
57	A2・A3	一括	IV	灰黄茶褐色	灰黄茶褐色	○	○	○	○	○		
58	B2	296 294	IV	黒茶褐色	赤茶褐色	○	○	○	○	○		
59	B2	307	IV	赤茶褐色	灰茶褐色	○	○	○	○	○		
60	B2	一括	IV	乳茶褐色	灰黒褐色	○	○	○	○	○	金雲母を含む	
61	B2	171	IV	乳茶褐色	灰黒褐色	○	○	○	○	○	金雲母を含む	
62	B2・B3	一括	IV	乳茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○	○	金雲母を含む	
63	B2	58	IV	乳茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○	○	金雲母を含む	
64	A2・B2	一括	IV	乳茶褐色	灰黒褐色	○	○	○	○	○		
65	A2	670	IV	黒茶褐色	茶褐色	○	○	○	○	○		
66	A2	700 654	IV	黒茶褐色	茶褐色	○	○	○	○	○		
67	A2	666	IV	茶褐色	茶褐色	○	○	○	○	○		
68	B2	875	IV	茶褐色	黒茶褐色	○	○	○	○	○		
69	B2	297	IV	茶褐色	黒茶褐色	○	○	○	○	○		
70	B2	878	IV	乳茶褐色	黒茶褐色	○	○	○	○	○		
71	B2・A3	75	IV	赤茶褐色	茶褐色	○	○	○	○	○		
72	A2	653	IV	赤茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○	○		
73	A2	一括	IV	赤茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○	○		
74	A・B-2・3	一括	IV	赤茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○	○		
75	A2	859	IV	赤茶褐色	茶褐色	○	○	○	○	○		
76	A2・B2	一括	IV	乳茶褐色	灰黒褐色	○	○	○	○	○		
77	A2・B2	一括	IV	乳茶褐色	黒褐色	○	○	○	○	○		
78	A2	671	IV	乳茶褐色	黒茶褐色	○	○	○	○	○		
79	A2	87	IV	赤茶褐色	黒茶褐色	○	○	○	○	○		
80	A2	273 97 96	IV	黒茶褐色	黒茶褐色	○	○	○	○	○	□縁部	
81	B2	289 110	IV	赤茶褐色	灰黄茶褐色	○	○	○	○	○	□縁部	
25	82	A2	92	IV	灰黄茶褐色	灰黄茶褐色	○	○	○	○	□縁部	

第5表 土器観察表(2)

挿図	番号	出土区	取上番号	層	色調		胎土				備考		
					外面	内面	石英	長石	砂粒	雲母		礫	
25	83	A2	一括	IV	黒茶褐色	黒茶褐色	○	○	○	○		口縁部	
	84	A2	925	IV	赤茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○		口縁部	
	85	A2・A3	一括	IV	乳茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○		口縁部	
	86	A2	850	IV	灰黒茶褐色	灰黒褐色	○	○	○	○		口縁部	
	87	B2	209	IV	茶褐色	茶褐色	○	○	○	○		口縁部	
	88	B2	57	IV	茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○			
	89	B2 A2・3・4	118 112 662	113 117 665	IV	乳茶褐色	灰黒褐色	○	○	○	○		
	90	A2	1023	IV	乳茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○			
	91	B1	940	IV	赤茶褐色	茶褐色	○	○	○	○			
	92	B2	240	IV	黒茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○			
	93	A2	897	IV	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○	○	○			
	94	B2	59	IV	茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○			
	95	B3	797	IV	茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○			
96	A2・A3	一括	IV	茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○				
97	A2・A3	一括	IV	乳茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○				
98	4T(確認)	98	IV	赤茶褐色	茶褐色	○	○	○	○				
99	B2	64	IV	茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○				
100	A2・B2	一括	IV	乳茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○				
101	B3	565	IV	赤茶褐色	黄茶褐色	○	○	○	○				
102	B2	69	IV	黒茶褐色	黒褐色	○	○	○	○				
103	A2	898	IV	茶褐色	黒茶褐色	○	○	○	○				
27	104	A3 A2	611 630	662 856	IV	赤茶褐色	黒茶褐色	○	○	○	○	口縁部	
	105	A2	673	IV	乳茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○		口縁部	
	106	A2	846	843	IV	黒茶褐色	黒茶褐色	○	○	○	○	口縁部	
	107	A3・A2	一括	IV	乳茶褐色	黒茶褐色	○	○	○	○			
	108	5T(確認)	55	IV	黒茶褐色	茶褐色	○	○	○	○			
	109	A3	721	IV	黒茶褐色	茶褐色	○	○	○	○			
	110	A2	856	IV	黒褐色	乳茶褐色	○	○	○	○			
	111	A3・A2	一括	IV	黒茶褐色	茶褐色	○	○	○	○			
	112	B2・A1	227	892	IV	赤茶褐色	黄茶褐色	○	○	○	○	口縁部	
	113	A3	714	IV	灰黄茶褐色	灰黄茶褐色	○	○	○	○			
114	A1	1017	IV	赤茶褐色	赤茶褐色	○	○	○	○				
115	B2	955 129	951 125	IV	灰黄茶褐色	灰黄茶褐色	○	○	○	○	○		
116	B3	1034	IV	乳茶褐色	黒褐色	○	○	○	○				
117	B2	115	IV	乳茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○	○			
118	A1	171	168	IV	赤茶褐色	黒褐色	○	○	○	○			
119	B2	954	IV	乳茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○				
120	A1	1008	IV	乳茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○				
121	A1	165	IV	乳茶褐色	黒茶褐色	○	○	○	○				
122	B1	176	IV	乳茶褐色	黒茶褐色	○	○	○	○				
123	B1	一括	IV	乳茶褐色	黒茶褐色	○	○	○	○	○			
124	B1	156	IV	乳茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○				
125	A2	3	IV	乳茶褐色	黒褐色	○	○	○	○	○			
126	AB	一括	IV	黒茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○				
127	B2	123	IV	乳茶褐色	茶褐色	○	○	○	○				
128	A・B-2・3	一括	IV	乳茶褐色	茶褐色	○	○	○	○				
129	B2	119	IV	灰黒茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○	○			
130	A2	198	IV	乳茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○				
131	A1	174	IV	茶褐色	茶褐色	○	○	○	○				
30	132	A1	170	IV	茶褐色	黒褐色	○	○	○	○			

第6表 土器観察表(3)

挿図	番号	出土区	取上番号	層	色調		胎土				備考	
					外面	内面	石英	長石	砂粒	雲母		礫
30	133	B2	436	IV	灰黄茶褐色	茶褐色	○	○	○	○		
	134	B2	107	IV	乳茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○		
	135	A1	163	IV	乳茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○		
	136	B2	945	IV	乳茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○		
	137	B2	127	IV	乳茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○		
	138	A1	192	IV	乳茶褐色	灰黑茶褐色	○	○	○	○		
	139	B3	51	IV	乳茶褐色	赤茶褐色	○	○	○	○		
	140	A1	1002	IV	灰黑褐色	赤茶褐色	○	○	○	○		
	141	A1	468	IV	乳茶褐色	茶褐色	○	○	○	○		
	142	B2	949	IV	乳茶褐色	茶褐色	○	○	○	○		
	143	A1	167	IV	赤茶褐色	黑褐色	○	○	○	○		
	144	B1	157	IV	乳茶褐色	赤茶褐色	○	○	○	○		
	145	B2	972	IV	乳茶褐色	赤茶褐色	○	○	○	○		
	146	B2	207	IV	乳茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○		
	147	B2	234	IV	赤茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○		
148	B2	973	IV	乳茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○			
149	B2	一括	IV	乳茶褐色	灰黑褐色	○	○	○	○			
150	A1	1022	IV	灰黄茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○			
151	B1	151	IV	灰黄茶褐色	灰黑褐色	○	○	○	○			
32	152	A3	399 496 630 404 591	IV	乳茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○	○	口縁、金雲母を含む
	153	A3	351 716 741 352	IV	灰黑茶褐色	灰黄茶褐色	○	○	○	○		口縁部
	154	A2	86 508	IV	灰赤茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○	○	口縁部
33	155	A1	1007	IV	灰黄茶褐色	灰黄茶褐色	○	○	○	○		口縁部
	156	B3	791	IV	灰茶褐色	灰黑褐色	○	○	○	○		口縁部
	157	B2	874	IV	灰黑茶褐色	灰黑茶褐色	○	○	○	○		口縁部
	158	4T(確認)	7	IV	灰赤茶褐色	灰黑茶褐色	○	○	○	○		口縁、金雲母を含む
	159	A2	254	IV	黑茶褐色	灰黄茶褐色	○	○	○	○		口縁部
	160	A2	669	IV	灰赤茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○		口縁、金雲母を含む
	161	B2	126	IV	灰黄茶褐色	茶褐色	○	○	○	○	○	
	162	A3	358	IV	乳茶褐色	黑茶褐色	○	○	○	○	○	口縁、金雲母を含む
	163	A3	482	IV	乳茶褐色	黑茶褐色	○	○	○	○	○	金雲母を含む
	164	A3	405	IV	乳茶褐色	黑茶褐色	○	○	○	○	○	金雲母を含む
165	A3	345	IV	乳茶褐色	黑茶褐色	○	○	○	○	○	金雲母を含む	
166	B1	988	IV	乳茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○	○	金雲母を含む	
35	167	A2	672 699 681 696 688 684 667 673 680	IV	灰赤茶褐色	灰黑褐色	○	○	○	○		
	168	A2	136	IV	赤茶褐色	茶褐色	○	○	○	○		
	169	A3	807	IV	赤茶褐色	黑茶褐色	○	○	○	○		
	170	A2	676 681 698 702 703 707 708	IV	灰赤茶褐色	灰黄黑褐色	○	○	○	○		
	171	A3	621 1026	IV	赤茶褐色	茶褐色	○	○	○	○		
	172	A3	338 341	IV	灰黄茶褐色	茶褐色	○	○	○	○		底部
	173	A3	356 348 480	IV	茶褐色	茶褐色	○	○	○	○		底部
	174	A2・A3	16 31 39	IV	灰茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○	○	底部
	175	4T(確認)	48	IV	灰茶褐色	黑茶褐色	○	○	○	○	○	底部
	176	B2	105	IV	乳茶褐色	乳茶褐色	○	○	○	○		底部

第7表 石器観察表(1)

挿図	番号	器種	出土区	取上番号	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	石材
38	177	石鏃	A-2	922	3.5	1.7	0.2	1.4	頁岩
	178	石鏃	B-3	1028	2.2	1.4	0.2	0.6	頁岩
	179	石鏃	A-2	82	3	1.9	0.5	1.1	頁岩
	180	石鏃	A-1	222	1.9	1.5	0.4	0.6	頁岩
	181	石鏃	B-7	316	3.1	1.4	0.4	1.1	頁岩
	182	石鏃	A-3	1035	1.9	1.6	0.3	0.5	頁岩
	183	石鏃	B-1	150	1.8	1.3	0.3	0.3	頁岩
	184	石鏃	A-3	395	1.1	1.3	0.3	0.2	黒曜石(姫島)
	185	石鏃	B-7	310	1.7	1.3	0.4	0.5	頁岩
	186	石鏃	B-2	80	3.2	2	0.5	2	頁岩
	187	石鏃	A-3	720	1.2	0.9	0.3	0.2	黒曜石(姫島)
	188	石鏃	A-2	12	1.7	1	0.3	0.4	黒曜石(姫島)
	189	石鏃	A-2	529	1.5	1.2	0.4	0.5	黒曜石(姫島)
	190	石鏃	A-3	515	1.9	1.2	0.2	0.4	頁岩
	191	石鏃	A-3	21	2	1.4	0.4	0.8	頁岩
	192	剥片石器	A-3	831	2.2	1.9	0.6	2.4	黒曜石(姫島)
	193	剥片石器	B-7	311	1.4	1.7	0.3	0.5	黒曜石(腰岳)
	194	石核	A-2	94	4.2	6.1	2.1	64.4	チャート
195	剥片石器	A-2	274	13.8	7.8	1.4	173	砂岩	
196	石斧	B-1	224	17.9	7.4	3	486	ホルンフェルス	
39	197	石斧	A-1	219	14.8	7	3.5	477	ホルンフェルス
	198	石斧	A-2	96・487	15.7	5.5	2.6	349	ホルンフェルス
	199	石斧	A-2	858	12.5	8.2	2.9	344	ホルンフェルス
	200	石斧	B-3	793	7.5	3.9	1.2	42.7	ホルンフェルス
	201	石斧	A-3	229	4.8	3.8	1.2	29.7	ホルンフェルス
	202	石斧	A-3	516	5.9	2.1	0.7	8.6	頁岩
	203	石斧	A-2	195	18.3	7.5	2	286	ホルンフェルス
	204	石斧	A-3	1025	7.6	5.1	1.8	112.2	ホルンフェルス
	205	石斧	A-2	536	8	4.4	2.3	108	ホルンフェルス
	206	異形石器	B-3	415	24.4	10.7	3.3	1300	ホルンフェルス
	207	異形石器	A-3	495	3.6	2	0.7	3.18	チャート

第8表 石器観察表(2)

挿図	番号	器種	出土区	取上番号	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	石材
40	208	スクレーパー	A1	997	5.6	8.3	2	90	砂岩
	209	磨石・敲石	A1	1015	8.7	7.3	4	370	砂岩
	210	台石・石皿	A2	661	25	23.5	9	7350	砂岩
	211	台石・石皿	A2	216	24.7	25	6.2	5700	砂岩
	212	台石・石皿	A2	246	26.2	16	4.6	2290	砂岩
	213	台石・石皿	A3	412	25	20.2	5.5	3450	砂岩
	214	台石・石皿	B2	66	22	19.3	4.3	2900	砂岩
41	215	台石・石皿	A2	691	22.9	31.5	4.8	6900	砂岩
	216	台石・石皿	B2	215	23.1	20.9	5.4	3470	砂岩
	217	台石・石皿	A2	690	36.4	22	9.3	10600	砂岩
	218	台石・石皿	B2	840	50.2	49.6	9.4	34800	砂岩

第Ⅳ章 科学分析

年代測定については、1号集石内出土炭化物（Ⅱ地点）、5号集石内出土炭化物（Ⅰ地点）、土器集中出土地より出土炭化物についてバリノ・サーヴェイ株式会社が分析を行い、併せて炭化材の樹種同定も実施した。

以下については、表題の一部のみを変更して、各報告書の原文を掲載することとする。

- 1 東前平遺跡（Ⅱ地点）から出土した炭化物の放射性炭素年代測定
バリノ・サーヴェイ株式会社
- 2 東前平遺跡（Ⅰ地点）から出土した炭化材の放射性炭素年代測定と樹種同定
バリノ・サーヴェイ株式会社
- 3 東前平遺跡（Ⅰ地点）土器集中出土地より出土した炭化材の年代測定と樹種同定
バリノ・サーヴェイ株式会社

1 東前平遺跡（Ⅱ地点）から出土した炭化物の放射性炭素年代測定

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

東前平遺跡は、種子島東海岸の台地上に位置する。本遺跡の発掘調査では、第Ⅳ層から集石や配石が検出されており、出土層位や土器（前平式・下剥峯式）の特徴から縄文時代早期の遺構と考えられている。

今回の分析調査ではⅡ地点から出土した炭化物試料について放射性炭素年代測定を行い、その年代に関する情報を得る。

1. 試料

試料は、Ⅱ地点の炭化物が付着した土器片2点と1号集石内から出土した炭化材1点の合計3点である。当初は、土器付着炭化物を用いて年代測定を行う予定であったが、付着している炭化物が少量で年代測定に必要な量を確保できなかったため、1号集石内炭化物を用いて年代測定を行うこととする。

2. 方法

測定は、加速器質量分析法(AMS法)で行い、放射性炭素の半減期はLIBBYの5568年を使用した。なお、測定は、株式会社加速器分析研究所(IAA)が行った。

3. 結果

放射性炭素年代測定結果を表1に示す。年代は、8770±60BP(補正年代8770±60BP)であった。なお、炭化材は小片で全量を年代測定試料としたため、樹種同定は実施しなかった。

表1 放射性炭素年代測定結果

地点	層位	遺構・試料名	試料の質	測定年代	δ13C	補正年代	Code No.
Ⅱ地点	Ⅳ層	1号集石内炭化物	炭化材	8770±60BP	-25.20±0.74‰	8770±60BP	IAAA-30604

1) 年代測定は加速器質量分析法(AMS法)による。

2) 測定年代は1950年を基点とした年数で、補正年代はδ13Cの値を基に同位体効果による年代誤差を補正した値。

3) 放射性炭素の半減期は5568年を使用した。

4. 考察

1号集石等の集石や配石は、いずれもⅣ層から検出されており、出土土器(加栗山式・下剥峯式)から縄文時代早期と考えられている。九州における縄文時代早期の年代については、これまでの年代測定結果で10240BPから6360BPの年代値(いずれも未補正值)が得られている(キーリ・武藤, 1982)。今回の年代測定値は、既知の年代幅に収まっており、発掘調査所見とも一致する。

ところで西之表市内では、青野原遺跡の塞ノ神式土器に伴う炭化材で、7730BP(補正年代7690BP)の値が得られている。また南九州地域の縄文時代早期土器は、前平式→吉田式→石坂式→平橋式→塞ノ神式に編年されている(西、1996)。本遺跡で青野原遺跡よりも古い年代値が得られたことは、既往の土器編年とも調和的である。今後、さらに各時期の年代測定を行い、本地域における各土器編年と年代に関する資料を蓄積したい。

引用文献

- キーリ C.T. 武藤康弘(1982)縄文時代の年代。加藤晋平・小林達雄・藤本 強編「縄文文化の研究1 縄文人とその環境」, P.246-275, 雄山閣。
- 西 健一郎(1996)九州地方の縄文土器。大川 清・鈴木公雄・工楽善通編「日本土器事典」, P. 8-9, 雄山閣。

2 東前平遺跡(I地点)から出土した炭化材の放射性炭素年代測定と樹種同定

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

東前平遺跡は、種子島東海岸の台地上に位置する。本遺跡ではII地点の発掘調査により、縄文時代早期の土器(前平式・下副釜式)を伴う遺構が検出されている。このうち、1号集石から出土した炭化材を対象とした放射性炭素年代測定では、 8770 ± 60 BP(補正年代 8770 ± 60 BP)の値が得られている。

今回は、I地点の5号集石内から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行い、遺構の構築時期に関する資料を得る。また、炭化材の樹種同定を併せて実施し、木材利用に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、5号集石内から出土した炭化材である。炭化材は、一袋中に微細な破片が多数入った状態であったため、2mm角以上の炭化材20点を抽出して試料とした。炭化材は、実体顕微鏡で観察した結果、20点中19点が同じ種類の針葉樹であり、残り1点が広葉樹であった。そのため、19点の針葉樹から、樹種同定用の1点を除いた18点を放射性炭素年代測定用の試料とした。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、加速器質量分析法(AMS法)により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基準とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma)に相当する年代である。なお、暦年較正はRADIOCARBONCALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年較正曲線を用いる条件を与えて計算させている。

(2) 樹種同定

木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定結果を表1、暦年校正結果を表2に示す。測定年代(補正年代)は6520BP、暦年校正年代は, cal BC5382-5401, 5420-5444, 5466-5527であった。

(2) 樹種同定

20片の炭化材のうち, 19点が針葉樹のマツ属複維管束亜属であった。1点は広葉樹であるが, 微細片で保存状態が悪いために電子顕微鏡による観察ができず, 種類は不明である。解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属 (Pinus subgen. Diploxylon) マツ科

軸方向組織は仮道管を主とし, 晩材部付近には性状樹脂道も認められる。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで, 晩材部との境界は不明瞭。放射組織は仮道管, 柔細胞, 樹脂道, エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状で, 1分野に1個。放射仮道管内壁には鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列, 1-15細胞高。

表1. 放射性炭素年代測定結果

遺構	試料の質	樹種	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code. No.
集石内	炭化材	マツ属複維管束亜属	6520±50	-28.63±0.87	6580±50	IAAA-32130

- 1) 年代値の算出にはLibbyの半減期5570年を使用。
- 2) BP年代値は, 1950年を基準として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は, 測定誤差 δ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表2. 暦年校正結果

試料名	用途	補正年代 (BP)	暦年校正年代(cal)			相対比	Code No.
			cal BC	cal BC	cal BP		
集石内	炭化材	6516±50	cal BC 5,401 - cal BC 5,382	cal BC 5,382	cal BP 7,331 - 7,350	0.175	IAAA-32130
			cal BC 5,444 - cal BC 5,420	cal BC 5,420	cal BP 7,369 - 7,393	0.231	
			cal BC 5,527 - cal BC 5,466	cal BC 5,466	cal BP 7,415 - 7,476	0.594	

- 1) 計算には, RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 付記した誤差は, 測定誤差 δ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

4. 考察

(1) 測定について

炭化材の年代値は、未補正值で6580BP、補正年代で6520BPとなる。暦年較正年代は、cal BC5382-5401, 5420-5444, 5466-5527 (cal BP7331-7350, 7369-7393, 7415-7476)であった。この値は、九州地方でこれまでに行われた年代測定のうち、縄文時代早期の年代測定値 10240BP-6360BP(いずれも未補正值)に相当する(キーリ・武藤, 1982)。本遺跡のⅡ地点では、縄文時代早期(前平式・下剥峯式)と考えられる1号集石から出土した炭化材を対象とした放射性炭素年代測定で、8770±60BP(補正年代8770±60BP)の値が得られている。今回の測定値は、1号集石の測定値よりも約2000年新しい年代を示している。

今回得られた年代値については、今後出土土器等の考古学的情報も含めて検討することがのぞまれる。

(2) 木材利用

炭化材は、集石内から出土していることから、燃料材などに由来する可能性がある。炭化材には複雑管束亜属と種類不明の広葉樹林が認められ、少なくとも2種類が利用されていたことが推定される。複雑管束亜属が多いが、いずれも微細片であることや組織が似ていることから同一個体由来する可能性もある。日本に生育する複雑管束亜属には、アカマツ、クロマツ、リュウキュウマツの3種があるが、本地域ではクロマツが一般的である。クロマツは、沿海地の砂丘上等に生育する種類であり、遺跡周辺で入手可能な木材を利用したことが推定される。

引用文献

キーリ C.T.・武藤 康弘, 1982, 縄文時代の年代, 加藤 晋平・小林 達雄・藤本 強(編)「縄文文化の研究1 縄文人とその環境」, 雄山閣, 246-275.

3 東前平遺跡 (Ⅰ地点) 土器集中出土地より出土した炭化材の年代測定と樹種同定

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

西之表市の東前平遺跡 (Ⅰ地点) 発掘調査に伴い、出土した炭化材について樹種を明らかにすると共に、遺構の年代に関する資料を得ることを目的として、14C年代測定(AMS法)を実施する。

1. 試料

試料はⅠ地点土器集中出土地より検出された炭化材試料2点である。2試料共に材同定を実施し、試料1については、14C年代測定(AMS法)を実施する。

2. 分析方法

2-1 14C年代測定(AMS法)

測定はAMS法で行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、

測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差 (One Sigma) に相当する年代である。なお暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、北半球の大気圏における暦年較正曲線を用いる条件を与えて計算している。

2-2 材同定

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の破断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

3-1 14C年代測定 (AMS法)

測定結果を表1に、暦年較正結果を表2に示す。

表1. 放射性炭素年代測定結果

試料番号	試料の質	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP
1	炭化材	6,770±45	-23.94±0.91	6,780±45

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 δ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表2. 年代値の暦年較正結果

試料	補正年代 (BP)	暦年較正年代(cal)	相対比
1	6,770±45	cal BC 6,227 - cal BC 6,202 cal BP 8,216 - 8,148	0.617
		cal BC 6,127 - cal BC 6,122 cal BP 8,016 - 8,071	0.092
		cal BC 6,112 - cal BC 6,094 cal BP 8,055 - 8,123	0.013
		cal BC 6,066 - cal BC 6,084 cal BP 8,020 - 8,013	0.090
		cal BC 5,970 - cal BC 5,976 cal BP 7,898 - 7,933	0.027

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

3-2 材同定

炭化材同定結果、試料1は針葉樹のマツ属複維管束亜属に、試料2は広葉樹のコナラ属アカガシ亜属に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・マツ属複維管束亜属 (*Pinus subgen. Diploxylon*) マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道及び水平樹脂道が認められる。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中薄～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

第V章 調査のまとめ

第1節 遺構

遺構は、集石・配石が検出された。

集石はⅠ地点から1基（第15図5号集石）、Ⅱ地点から4基（第12図1～4号集石）検出された。

5号集石は約1.6m×2.0mの大きさを呈し、礫約70点から構成され、中心部の礫は炎熱により赤化し、熱破砕を受けているものが多数見受けられた。4号集石は礫約150点から構成され、礫がぎっしりと密集した状態であった。配石は2基（第12図1号配石・2号配石）が検出された。いずれも第Ⅳ層から検出されたものである。いづれの配石も構成される礫が少なく、1号配石は礫がばらけた状態で7点、2号配石は3点の礫で構成されているが、検出状況などから配石と判断したが用途は不明である。集石・配石を構成する礫の石材は全て砂岩であった。調査範囲の狭いⅡ地点から4基の集石が検出されたことから周辺に住居址等の生活遺構の存在が考えられる。

第2節 遺物

（Ⅱ地点出土遺物）

出土土器のうち、Ⅰ類土器としたものは貝殻条痕の上に直線状の貝殻刺突文を重ねる2重施文を行っており器形は角筒形になる。内面の調整にはケズリが見られ、前平式土器（加栗山式）の範疇に入るものと思われる。本市において明確な角筒形の土器が発掘調査において出土したのは初めてのことである。Ⅱ類土器は口縁部が内湾し口唇部は平坦で、文様は貝殻刺突文で構成される特徴をもち、下割峯式土器の範疇に入るものと思われる。石器は磨石・箴石のみの出土であり、出土点数もそれほど多くはなかった。

（Ⅰ地点出土遺物）

番号を付けて取上げた遺物は1,035点に及び土器は文様等のバリエーションで6つの類に分類した。

Ⅳ類土器としたものは、外面に山形押型文や山形に近い押型文を施したものである。押型文が細やかで小波状に近いもの（30～34）、間延びた彫りの浅いもの（35～56）と大きく2種類あり、間延びたものは手向山式土器の範疇に入るものと思われる。押型文土器の出土は本市においては、これまで国上久保田遺跡での表採品が数点あったが、発掘調査で出土したのは初めてのことである。

Ⅴ類土器としたものは外面に凹線文・沈線文・回転刺突文を施したもので本遺跡の出土土器の主体となるものである。総数420点の出土であった。出土土器は非常に小片が多いのが大きな特徴である。口縁部や胴部中央付近に突帯文を施すものもあり、沈線は粗く、繊細ではない感がある。器形は口縁部が大きく外反し、頸部でくびれ、胴部下位が屈曲しながら次第にすぼまっていくものである。回転刺突文は非常に細かいものであり、トゲ状の突起が付いた原体を回転させ施文している。これらの土器は手向山式土器あるいは手向山式類似土器の範疇に入るものと思われる。

Ⅵ類土器としたものは、外面に沈線文・刺突文を幾何学的に施すもので、口縁部は肥厚せずその

また外反するものや、突帯文を施すものもある。総数23点の出土であった。104は口縁部が外反し、頸部には沈線が組み合わさり、渦状を描いている。105・106は口縁部に突帯文を巡らしている。手向山式土器の系譜を引く妙見・天道ヶ尾式土器の範疇に入るものと思われる。

Ⅶ類土器としたものは、外面に横位の凹線文帯・縦位の燃糸文帯を施したものである。縦位の燃糸文帯は無文部と交互に単独に施文されている。横位の凹線文帯は3条から5条施されているが、凹線文帯を屈曲させているものも見受けられる。この凹線文帯は頸部・胴部中央部・胴部下端部に施されている。

燃糸文帯は凹線文帯を境に施しているものと凹線文帯内にも施文しているものがある。器形は口縁部が大きくラッパ状に外反し、胴部は若干張り出しながら底部にかけてすぼまっていくものと思われる。これらの土器は柵ノ原式土器の範疇に入るものと思われる。109点の出土であったが、小片が多い。

Ⅷ類土器は外面に貝殻刺突文・条線・沈線文を施すものである。器形はⅦ類土器と同様口縁部がラッパ状に大きく開く形態で、胴部は円筒形を呈する。貝殻文系室ノ神式土器の範疇に入るものである。152は口縁部から頸部にかけて横位の貝殻刺突文が4条施されている。153は頸部付近に縦位の貝殻刺突文を連続的に横位に施して、この刺突文の上部には山形を呈する条線文を3条施し、下部の胴部中央部には3条の横位の沈線文がみられる。154は口縁部に2条の貝殻刺突文を横位に巡らし、沈線文を施しているものである。また、152～153は口唇部にも貝殻刺突文が見られる。

Ⅸ類土器は外面に貝殻条痕文を施したものと無文土器、底部片である。167は小径の厚みのある底部を持ち、外傾しながら立ち上がり、若干内湾しながら口縁部に向かっていくものと思われる、厚みのある土器である。底部片は小片が多く、図化したのは5点である。172から176は底部片である。いずれも小型の平底の底部で172から175は上げ底の底部である。特に172・173は上げ底が顕著であり、形態から手向山式土器の底部と思われる。

石器類は石鏃、石斧類が出土したのに比べ、磨石・敲石類、台石・石皿類の出土が少なかった。また異形石器(206・207)が2点出土している。現時点では祭祀用として用いられたものと考えられる。石鏃の石材には姫島産の黒曜石が利用されており、当該時期の交流を物語る資料である。

第3節 総括

東前平遺跡は調査の結果、縄文時代早期の遺跡であることが判明した。出土した土器から縄文時代早期前葉から縄文時代早期終末期までのものである。最初に調査を行ったⅡ地点では縄文時代早期前葉・中葉の土器片が主に出土した。なかでも早期前葉の角筒土器が出土したことが注目される。本市においてはこれまで日守遺跡・鍛ノ刃遺跡でいわゆる円角筒土器は確認されていたが、明確な角筒土器が出土したのは、初めてのことであり貴重な資料となった。遺構は調査面積が狭小であったにもかかわらず、配石2基・集石4基が検出された。周辺に住居址等の存在が充分に考えられる。このⅡ地点で検出された1号集石の炭化物の年代測定では補正年代で8770±60BPがでている。

Ⅰ地点の調査では縄文時代早期中葉から終末期までの土器片が出土している。Ⅱ地点で出土した早期前葉の土器片の出土はなかった。Ⅰ地点から出土した土器片の大きな特徴はこれまで本市において出土例の少なかった押型文土器が多数出土したことがあげられる。これまで、種子島の縄文文

化は奥ノ仁田遺跡の調査等により、縄文時代草創期から南九州本土と同じ文化圏に属していることが言われてきたが、細かい時期区分においては欠落している土器様式が存在していた。特に早期の段階において押型文土器の出土報告例が少なく、10年程前には種子島には押型文土器の文化は移入しておらず、南限は鹿児島本土までと言われていた。しかしながら、本遺跡の調査によって押型文土器が出土したことにより、これまでいわれてきた、種子島の縄文文化は南九州と同じ文化圏であるということを確認する貴重な資料となった。

I地点で分類を行った土器の出土状況を見てみると、分布域に偏りがあることが伺われる。IV・V類土器は外面に押型文を施したものであるが、その分布域は調査区中央部である2区に集中している。VI類土器は出土遺物が少ないが、調査区北側A-3区に集中している。VII類土器は調査区中央部B-2区の出土が顕著である。VIII類土器とした貝殻文系土器は調査区北側A-3区からの遺物の出土量が多いが、全体的に散在した感が強い。出土土器のレベル差はほとんどなく、分布域から時間差を判断することは困難であるが、少なくとも土器様式から遺跡内で生活域が異なっていたことが考えられる。

出土した土器の編年については、南九州の縄文時代早期中葉から後葉については現在様々な考えがあり、混乱しているため今回は文様構成で分類を行ったのみに留めた。今後の類例を踏まえ南九州をみながら種子島における編年を検討していきたい。

I地点の炭化物の年代測定は2点行っている。5号集石内の炭化物は補正年代で 6516 ± 50 BPがでている。また土器集中出土地から出土した炭化物は補正年代で 6770 ± 45 BPがでている。暦年較正年代ではそれぞれ、前者で紀元前7476-5401 (calBC以下略)、紀元前8216-5970とやや異なる数字がでている。今後も、年代測定の資料を増やしていく必要がある。

遺跡は種子島西之表市の東海岸部南側に位置し、I地点が標高56m、II地点が標高64mで眼下に太平洋を望む段丘の先端部の台地上に位置している。周辺には川が流れており、水の確保も十分である。また海岸部に隣接していることから磨石・台石・石皿類の石材となる砂岩の入手は容易にできたと思われる。また、姫島産・腰岳産の黒曜石が出土していることから、当時の交流が伺われる。なお、鹿児島本土産の黒曜石は出土していない。周辺の早期の遺跡からも黒曜石の出土があるが、圧倒的に姫島産のものが多く、これら黒曜石の移入についても検討する必要がある。

東前平遺跡が位置する東海岸部南側は、近年縄文時代草創期・早期（前葉～終末期）の発掘調査が相次ぎ、良好な資料が発見、報告されている。特に早期前葉の吉田式土器を伴う遺跡が多いのが大きな特徴であり、海岸伝いに連綿と遺跡が形成されている。草創期の遺跡は、この早期の遺跡よりも一段高い台地上に形成されていることが伺われる。本遺跡では、住居址・竪穴状遺構・土坑などの生活遺構が検出されなかったため、定住化を証明することは困難である、またなぜこの地に縄文時代早期の遺跡が数多く立地するのか、また遺跡の形成された時間差や季節的な回帰の点など未解明なことが多いが、今後の課題としたい。いずれにせよ、出土した土器型式の多様性などからある程度の長い時期にわたり断続的に使用し、形成された遺跡であると思われる。

写真図版



調査前



調査状況



調査風景



調査風景



調査風景



調査風景

II 地点調査風景(1)



Ⅱ 地点調査風景(2)



1号集石



2号集石



3号集石



4号集石



1号配石



2号配石

II 地点遺構



土器出土状況



土器出土状況



土器出土状況



土器出土状況



西側土層断面



東側土層断面

Ⅱ 地点土器出土状況・土層断面



I 地点調査風景(1)



I 地点調査風景(2)



土层断面



5号集石



遺物出土状況

I 地点土层断面・集石・遺物出土状況



I 地点遺物出土状況



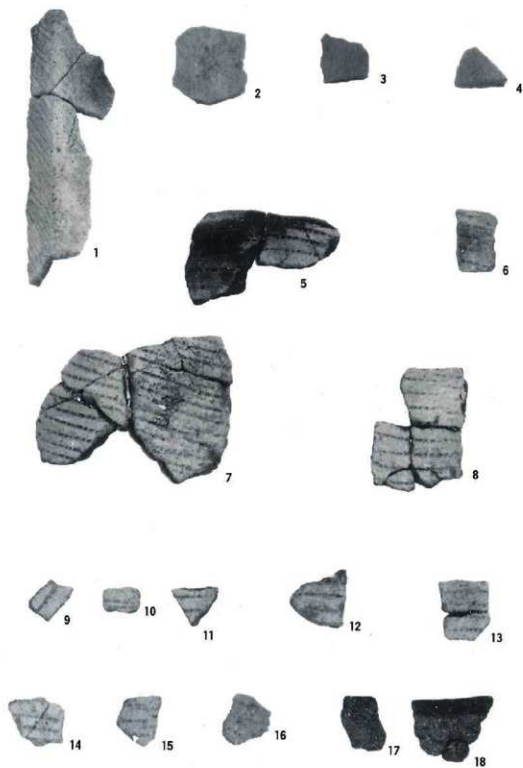
I 地点遺物出土状況



I地点遺物出土状況



I 地点遺物出土狀況



II 地点出土遺物(1)



19



20



21



22



23



24



25



26



27

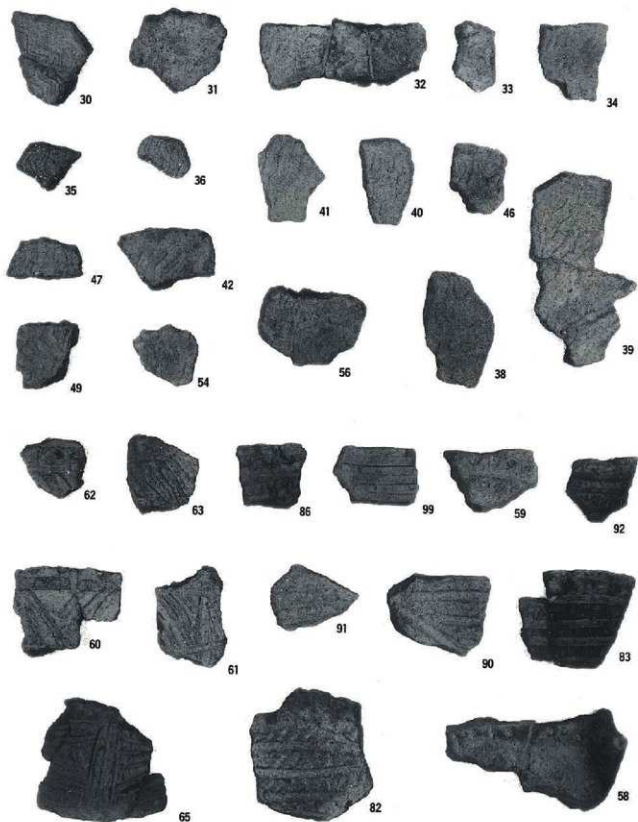


28

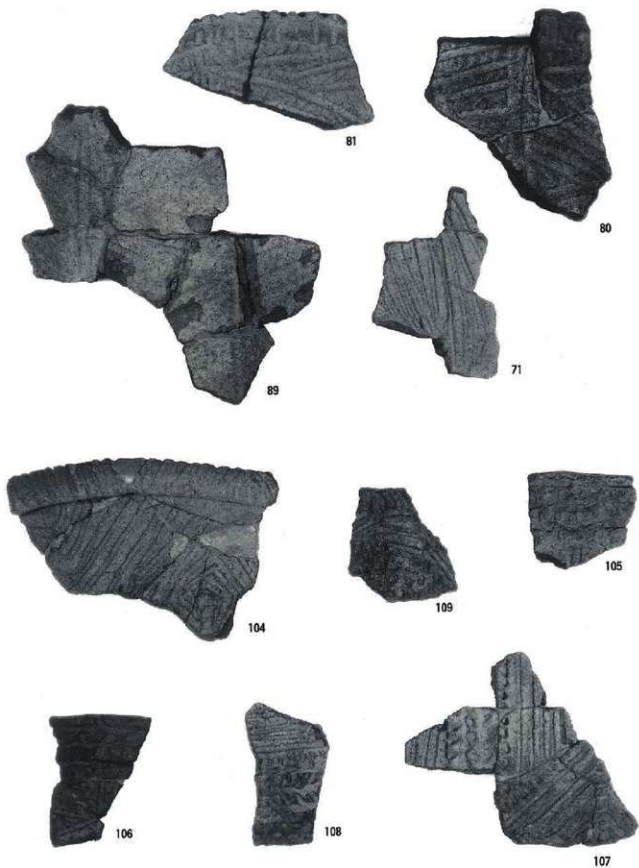


29

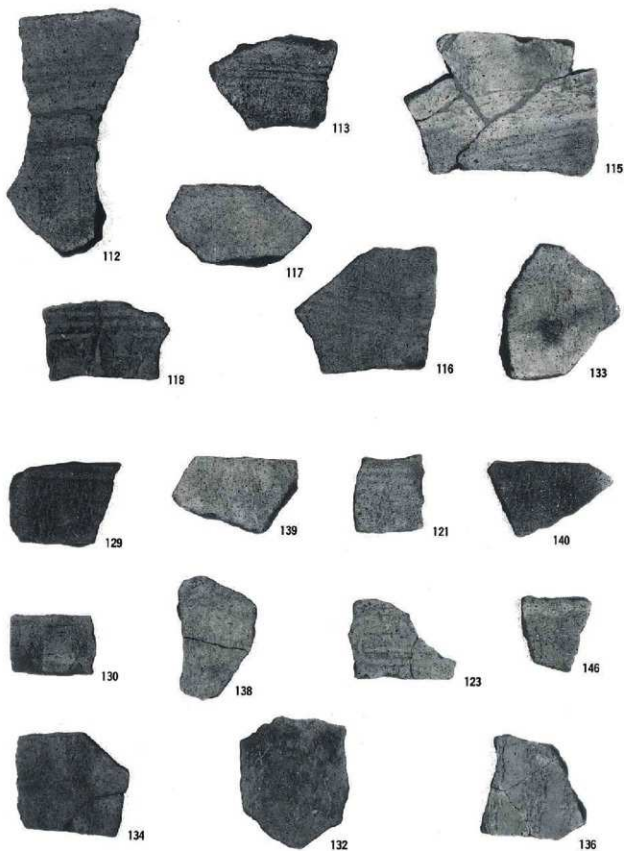
II 地点出土遺物(2)



I 地点出土遺物(1)



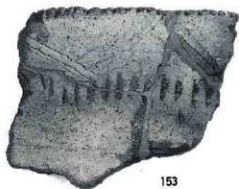
I 地点出土遺物(2)



I 地点出土遗物(3)



152



153



154

I 地点出土遺物(4)



155



156



158



159



163



157



167

I 地点出土遺物(5)



170



171



169



168



173



172



176

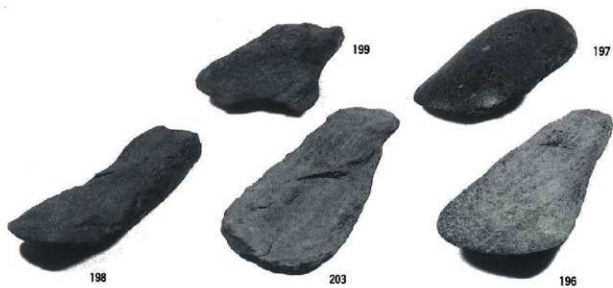
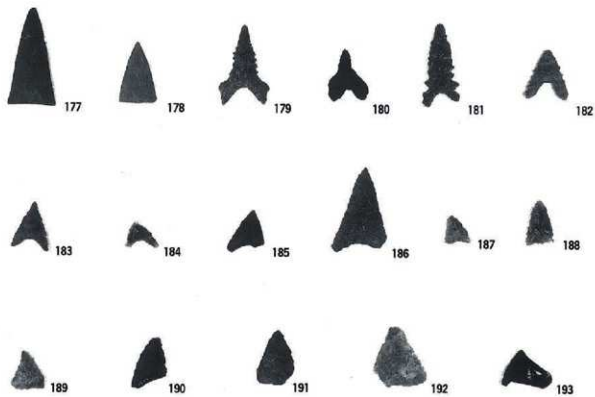


175



174

I 地点出土遺物(6)



I 地点出土遺物(7)



194



195



206

I 地点出土遺物⑧



202



201



200



204



205



207

I 地点出土遺物(9)



208



209



210



211



212



213

I 地点出土遺物(10)



214



215



216



217



218

I 地点出土遺物(1)

西之表市埋藏文化財発掘調査報告書08

東前平遺跡

発行日 平成18年3月
発行 鹿児島県西之表市教育委員会
〒891-3193 西之表市西之表7612番地
TEL 0997-22-1111
印刷 株式会社印刷
〒890-0072 鹿児島市新栄町25-7
TEL 099-257-3300